

特21

774

堀秀成先生

講演集

第參編

神風會發行

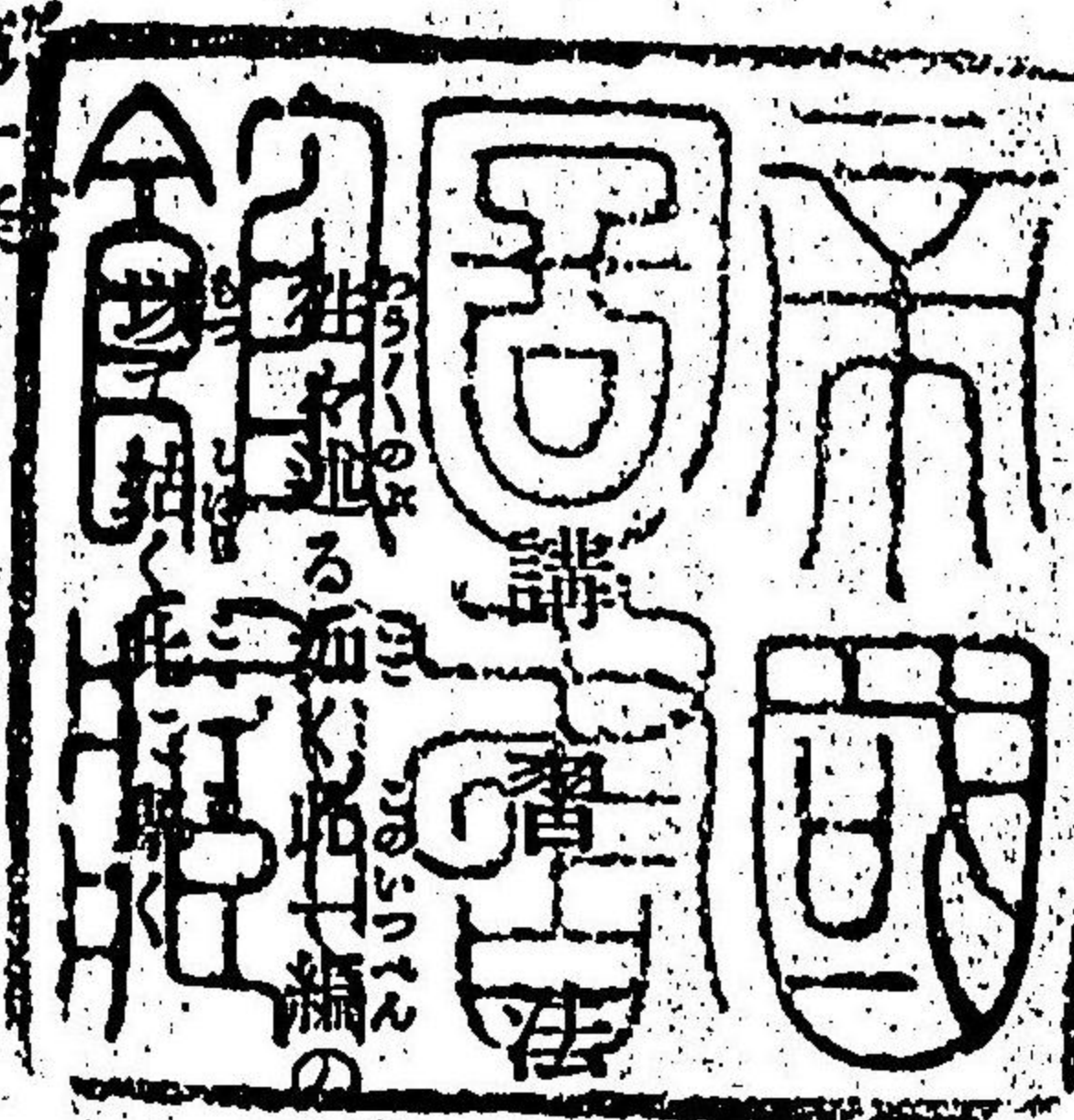
目次

● 講習法	● 忠魂託子	● 說教主要四箇目再論	● 富有	● 感小至大	● 食者天下之本	● 事實	● 說教四要論	● 說教問答	● 義論と實際は死活なる説	● 稱神名一致	● 政教名實論	● 神道名實論	● 慎獨	● 交際	● 產物製物論	● 感泣
一〇	一七	二〇	二五	三〇	三四	三九	四四	五一	五八	六三	六八	七三	七八	八三	八八	九三

25
72

特 21
771

講 演 集 第三篇



類は講録にあらずと雖も説教者の必心得べき事あるを

權少教正 堀 秀 成

明治
40 1 17
内交

第一條

説教は正講體に判然たるを要すべし事

物あれば則あり体あれば其体に種類なきこと能はず假令は人に男女老少美醜貴賤の
容あるが如し然れば講義にも各種の体あらざるを得ず文章に序跋論表種々の体ある
を知らば準へて講義に種々の体あるべきことを知るべし正講は其書の文字語意を解

し合せて一章の義理を正しく講し説教す古書の要語を擇取て講題として之を擧ると
 雖も文字の義理言辭の意義を解するを主とせず唯其語意を布延し夫れを補ふ所の例
 を引用して専ら俗論するものにて正講と説教は素より其主意を異にするものなれば
 從て其体裁の異あらざるを得ず此を近く方今の文書に比論せば正講は布告文の如
 く説教は諭達文の如し此二種の文書に於て必其文章の体裁に異なる所あるを以て
 知るべし（正講にも猶折衷の体をはじめ直解論講解讀等の体自然あるが如く説教に
 も亦体裁の分あることは己が書ける説教四要論にいへり）

第二條

一編中序主補結の段落に注意すべき事
 序は講題とする所の本文を略解し其主意を布延して一編の説論を占すことを先づ云
 起すを云次に主は其本文を承けて講題の主意を専ら説くを云假令は敬神の題ならば
 敬神の意を盡すものこれあり次に補は其主を補くる爲に比論を設け或は古今の談話

を以て主義を了解せしめむを云次に結を序に相應して一編を總括するを云此結の段
 中主義眼目の意を確固不拔の二三言をして聽者の肺肝を寒からしむるを得むことを
 目途とすべし然して此序主補結の四段落は姑く目して正体とす猶變體（變體のこと
 は秀成が著せる説教體裁論の前編に云へり）もあれども講習の初めにありては姑
 此正体に熟すべし（序主補結の段目は秀成初めて體裁論に云ふ處の名なれば起承轉
 合の普通に依らむ方穩なりと雖も説教の體裁に於るや起承轉合の名の適實ならざ
 る所無きにしもあらず姑く序主補結を段目とす）

第三條

一編の義脈首尾貫徹するを主とし或は題意に觸れ或は雜駁にして主義を害することあ
 かるべき事
 上に云ふ處の四段落はありと雖も首尾貫徹して義脈連續せざれば一編の体を占さず
 然るを首尾調はずして義脈の亂れたるは假令は一卷の布絹を解き見るに其端は絹を

以て織れるもの、末は麻糸を以て續け織れるもの、如し或は春色を談るもの、柳
櫻色を交へたる遠望の趣を談る中にいつしか訛轉して紅葉の水に流る、晩秋の景色
を述べることあるに似たり安んず体をあせるといはむや又題意に觸れ或は雜駁に流る
ものは皆講案に精をらす講録整す或は辨を頼みて講壇無本にして當意に任する
の粗なるに起るもの也

第四條

連語に緩急あり首尾に照應あり或は敬語をうへく或は激語を發すべく或は平穩の地波
瀾の節抑揚の辨等に熟達するを自途とすべき事

連語中緩あるものは急をして益急ならしむるものは假令は軍營を出るに緩ならし
むるは進撃に臨んで急をらしむる爲又對軍に林のごとく靜をらしむるは犯掠るに火
の如くならしむる爲あるが如し又急なるものは緩をして彌緩をらしむる爲なるは
雷聲滂雨の耳を駭したるが晴ぬる夕狂風激浪の船を動したるがをさまりぬる朝は其

起らざる初に勝りて靜けきこちするが如し然れば緩は急を背け急は緩を背け緩急
交々能其体を爲すこと糸竹の聲の呂律の調べに適へるが如きもの也若糸竹の聲ある
も首尾同一にして音に緩急の變化なくば何んぞ耳を樂ましむるに足らんや（説教に
從事せざる學者の論に詞に緩急あるを拙劣ありとするこの僻事ある由は秀成が著
せる説教問答に委しくいへり）又首尾に照應あるは首に係る所を設け尾に受る所を
述ぶ或は首に花の句をほめかし尾に實を結べる極を顯し或は山水首尾に分れて自
然一景をあしたる如く或は首尾に春秋の趣を分ちて其間往來相通ひて一歳を爲す
の体を聞せまご各種々の工夫を爲すべし又敬語を用うべき所に之を失したるは小事
に似たりといへども人間甚たよからぬものなり假令は神祇天皇等の上を述るに若失
して敬語を副へざる時は借上不遜の如く聞ゆるものあれば専ら此に注意すべし然れ
ども大義名分を破りたる足利氏の如き又徳川氏の如き或は徳川氏の擅制を以て家を
興したる諸侯の如きを尊崇して重き敬語を用るは大道を害る端とあることあり此も

又注意せずんばあるべからず又激語にあらざれば聴者の心を動すこと難き所あり又平穩の地波瀾の節とは説教の地の詞は必平坦にして穩和なる辨を專とすべし地の詞に稜角ありて罵詈するごとく聞ゆるは大に説諭の体を失ふに至る地の詞は玉を以て撫るが如く一節の極に至りては針を以て刺すに心經を動すが如く聴者をして活潑の情を起さしむべし又波瀾抑揚の辨等は講習の業の重るに従ひて自然生するものあれば講習の席を積むことを專とするあり

第五條

講題として擧る處の本文は記紀拾遺其他國史官牒列聖の詔勅宣命祝詞万葉集三代集の歌及律文等を用うべき事

但中古の歌或は漢籍の語其他とも一編中に引用するは妨なし
講題として擧る本文は要語を探りて上下を省き成るべきはと短文とすべし説教は正講に異りて聴者書を控へて聞くにあらざれば長文にては聞取難れはあり記紀拾遺其

他國史官牒とあるは古事記書紀古語拾遺五國史又は令式格の類を云列聖の詔勅宣命祝詞等は聞えたるが如し又萬葉集の哥は古人も毛詩に比したる如く此集の哥の如きは所謂真心を種として有のまゝに云ひ出たるものにて後世の巧に偽り設けたる類にあらす然れば上代の風儀の美しかりしことも人心の直く篤かりしことも當時を觀るものゝ如し是以て人心をして善に遷らしめ人情をして篤からしむるに引用する最此集に及きものあらす孔子の詩ニ云フ云と毛詩の句を擧げて我語を興したるも此意あり然れば講題に此集の歌を用る最穩にして可也と云べし三代集の哥は萬葉集の哥の補となるべし又律は人の爲へきことを爲さるを爲まじきことを爲るを罰するものにて其罰るは惡を懲らし善に遷らす法されは律文を俗諭し人民をして刑に就しめざること教導の欠くべからざる一也(律のことは已に講録中往々いへり)中古以後近世の哥といへども顯幽の教をたすくるに足るもの又漢籍等の語といへども本教に相反せざるものは博く取て一編の中間に引用するは最妨あることなし

第六條

雑書は成るへく上代の事實を取るべし中古近世と雖も造化の神徳を發揮し本教の裨益となるへき人間上の美談は妨るし新聞紙等の談其他猥褻に渉る類は注意して取るべからざる事

但美事と雖も出所不分明の談は用うべからず

雑書とあるは第五條の記紀拾遺云云以下の古典に對して云此條は説教中に引用する談を指せるあり成るへく上代の事實を取るべしと云ふは朝家の御盛にましく古義の廢れざりし時を引きて聽者をして古を信る志を興さしめ奮を慕ふ情を篤からしむるに便あればなり殊に上代の事實を引出るときは一編の説教自然卑俗の体に流れず打上めて聞ね説く所の大道の貴きを補ふに足れるを以てあり中古近世と雖も造化の神徳を發揮し云云と云ふは忠臣孝子の善行の顯るも皆神魂の作用にして造化の神徳の人の所業の上に著明く發揮するものにて最本教の裨益となるものとい

はざるを得ず故に近世の事といへども之を嫌はず然るに新聞紙上に記載せる談を注意して取らざるはいかにと云に大に其意あることなり委しくは説教問答にいへり就きて知るへし又猥褻の談と云は戯作の稗書に云ふものに似たる談或は落語家の話に近きものを云此らは大道を地に墜すの害あること能はず必禁止を加ふべきもの也又出所不分明の談は自ら書籍に依て求めたるにあらず他の引用したるものを孫引にする類にて所謂途に聞きて途に説くものにて其事實を誤ること無しと云へからず故に之を禁ずべし講録を編むに必書籍に照らして之を正くすへし且事に當りて書に求むるは常の讀書に勝りて學問の益あるもの也

第七條

一席は凡二十五分を以て度とすへき事

第八條

進退及講壇に着きて禮節を正く爲へき事

此第七第八の二條は注意を待たずしてよく聞へたり

忠魂託子

萬葉集卷六 橘は實さへ花さへ其葉さへ枝に霜おけといや常磐の木端詞に太上天皇
適宴皇后宮賜和哥及酒橘諸兄とあり諸兄橘宿禰の姓なるをもて橘に
寄せて賀の大御言を給ひし也斯て諸兄は難波皇子曾孫治部卿美努王子也初名葛城
諸兄と云後に上表して生を賜り臣とあらんことを請ふ其表文上志在盡忠云々臣
葛城等願賜橘宿禰姓とあり然るに其末孫正成卿兄弟又其子の盡忠の志深かり
しことの奇しく幽契ある由を委しく云べし正成卿の父は左近將監正立と稱して金剛山
の麓七郷を領す其館に楠の大樹あるを以て近郷の民貴みて世々楠殿と稱す然るに
正成卿は尊王の志篤く智略も勝れたる事を天皇聞し召て藤房卿を御使として笠置山
の行在所に召れ正成卿賊徒征伐の策を献し給ひて河内國に歸られ千早城に離られ大軍

の寄せ手を引受られて數々奇策を以て賊軍を惱まし給ひ千辛萬苦して遂に大政回復の
功を奏し給ひしか再足利尊氏賊とありけるをも破り給ひ尊氏敗して一度九州まで落
けるを尊氏九州の兵を従へて延元元年の夏大兵を率ゐて東上する時正成卿は猶策をた
てまつられしかども坊門宰相清忠卿支へられけるによりて其策行れさりければ正
成卿は終に聖運を開き給ふ秋あるまじき行末を思ひ量り給ひてこたひの軍に戦死した
まはんと思ひ定めて都を打立給ひ櫻井の宿に着せ給ひて正行朝臣を御膝の許に引よせ
て宣ひけるは我等いよく最後の運近きにありとたほへたり我この世になからん後は
天下は尊氏のものとならんこと必定なり此時足利より汝をまねかんとあるべし汝國
郡の欲に迷ひて萬一も賊に降ることあらば父か千辛萬苦の忠義は水の泡とあらん今よ
り河内國にかへり和田恩地の人々を父と思ひ人と成りて再菊水の旗を翻して朝敵を
退治せば泉下に在る我等に對して孝道此に過ぎたるはあらず我汝が人と成りを見届け
たくは思へと義の爲汝を願ふこと能すと宣ひつゝ忠臣鐵石の如き正成卿にも父子生

前の別にははしければ眼中涙を含み給ひつゝ、側に置き給ひし菊作の太刀を取り給ひこ
 れは一年戦功を稱し給ひて御手自給ひしもの也此を汝に譲り與ふるに依て身に憂きこ
 とありて父を戀しく思ふときは此形身の太刀を見て父が國家に盡したる志を思ひて
 ますゝ忠勤を抽すべしとて正行朝臣を藪里にかへし給ひて櫻井の宿を打立給ひ賊軍
 と戦ひて正成卿身に十一劍を被り弟正季と共に淺川の民家に退き入り玉ひ正季に謂
 て宣はく今兄弟死九泉に至る吾子何ぞ魂に託る所を欲るや正季打笑て曰願くは七回
 人間に生れて賊徒を滅むと云正成卿も我欲る所も同じと宣ひて之と交刺て死給ふ斯て
 正行朝臣は此時十一に成り給ふ河内にかへり給ひて父の遺誠身に染みて追念やむ時あ
 くたはしけるが尊氏正成卿の首を函に藏めて河内に送る正成卿の室及正行朝臣相視て
 慟哭す正行朝臣悲みて後房に入り祖きて自殺せむとせらるるを母之を見て固く止めて泣
 きつゝ諭して曰諺に梅檀は初生より芳し汝幼稚と雖も正成の子あり何を百世に流芳
 することを思はざるや今徒らに自殺するは父の遺訓を忘るゝに似たりと且諫め且怒り

て其刀を奪ひ給ふ正行朝臣は大に哭て倒れ給ひつ此より後は父命母訓心に刻し肝
 に銘し且暮離を復むと欲し給へり斯て正行朝臣人と成りてはしめて吉野の御所に參内
 の時は老若男女道の左右にいで、父正成卿の忠誠の深かりしことをしのびいて、袖を
 しほらぬ者はなし人々正行朝臣の行粧を見るに旗には切割の跡を残し從兵の甲の威糸
 は絶て物具のやつれたるに父正成朝臣に従ひて數度の戦を経し狀目前に見ねければい
 と、當時を思ひやられて面をあぐるものもなし吉野拾遺に（吉房朝臣の作此人は後醍
 醐天皇に仕られて崩御の後は落飾して松翁と號れけり）參内の儀式いとゆゝしくたと
 なしやかに主上も御衣の御袖をうるほし給ひ人々も涙にむせびぬ」としるせるはさも
 ありけむとたほゆ然るに正行朝臣は常に疾かちにははしましたることゝきこゆ（此事
 は末に云へし）正行朝臣或時吉野に參朝の時宮女の輿中に悲泣するものあり其故を問
 はしめらるゝに高師直欺きて誘ひ出す所といふ正行朝臣從士をして輿に副へる卒を
 悉く斬しめ其宮女を送りて上聞す宮女は辨内侍と云て聞わたる美人也帝内侍をして

正行朝臣に給ふ辞するに歌を以てせらる

とても世にちがらふべくもあらぬよにかりのちきりをいかてむすはむ」とよみ給ひしも行末の長かるへくもあらぬことを思はれたるにてはとあはれなり天平二年尊氏高師直及弟師泰をして兵六萬を發して攻來る正行朝臣弟正時和田賢秀等百四十餘人神水を斃て共に死を誓ふ此時行宮に詣て奏請して申給く先臣正成微力を展て強賊を夷け以て宸愛を安し奉る然に幾無して天下復亂れ逆徒來攻む終に命を湊川に致ぬ臣時年十一遺言して河内に還らしむ然るに臣年既壯にして常に身疾あり若不側之疾に遽嬰せば上には不忠の臣となり下には不幸の子とあらむ方今師直師泰來り犯さむとす實に臣が君恩を報し父命を竟すの秋也若彼が首獵るに非ずは則臣兄弟の首を彼に授けり雌雄の決此一戦にあり願は一たび龍顏を拜して去むといひ畢りて涙下る天皇召て親しく勅したまはく前日の二戰汝大に克を得たり汝累世の武功朕甚之を嘉尙す聞くに賊復兵を盡して來犯すと朕が出陣の勞を思ふ然りといへども進むを知て進は時を失さる

を欲するなり退を知て退くは全を圖るを欲するなり汝は朕が爪牙あり慎て自愛すべしと勅ありければ正行朝臣は恭き勅語の肝に銘し數行の涙とよめあへずして退出せられぬ然して衆を率て後醍醐天皇の廟に詣て告曰戰如利あらずばあへて生還らしと鏗を叩きて起つまた同盟の姓氏を如意輪堂の門の扉に書き其後に歌一首を誌されぬかへらしとかねてたもへば梓弓さかさかすに在る名をぞとよむる(明治十年二月九日主上大佛殿に入らせられ博覽會の品物を御覽になりける時此門の扉をみそなはして龍顏に御涙を浮べさせ給ひける由也秀成のこしをれ(みけしにもつゆかゝるまでよしの山ふかくたとりしあとを殘れる)斯て高師直入河内伊駒山に陣し兵を分ちて飯室山外山及四條畷に進む楠家の兵三千之に對す正行朝臣兵三百を以て直にすゝみて奮撃し大に師直の兵を敗るこゝに於て兵を集め衆馬より下り壁に據りて坐食し食畢りて歩進し接戰益勵み遂に師直の陣に迫る上山高元師直を偽稱して戰死す其甲に高氏の家族を鎮む正行朝臣大に喜び首を空中に擲て手に承ること再三既にして其偽を知りて乃

首を地に投ぐ此日巳の時より申の時に至りて凡三十餘合楠家の兵死亡して兵五十余人をのこす正行朝臣數刻の奮戦自ら敵首五十餘級を斬る遂に進みて復師直に迫る然して正行朝臣兄弟体中數箭を受られ兵も皆重創用ること能はず正行朝臣の呼曰事畢ぬ賊の爲に獲ること莫れとて正時と交刺し北に向ひ再拜頓首して斃る時に二十三(大日本史列傳を採る)祖先諸兄公の志盡忠在と申し給ひしは空しからず其子孫に正成郷をいだせり又次祖三代志操變らす忠を盡れたるは諸兄公に賜りたる御製の橋は實さへ花さへその葉さへ云々であるに自然よく合へり斯て正成卿兄弟湊川にて交刺死し給ふ時を熟くたもへば其體は必子に託せることを得ず故に正行朝臣兄弟猶交刺して死れたるは全く父子の趣きに異なることあかつ出軍の時の奏言に依れば常に正行朝臣疾おはしたる事に聞ゆるを此最後の合戦は實に人間上のことにあらず奇異あるまでにおぼゆるは正しく父正成卿の忠魂の託り給ひしは疑ひなきことあり(橋守部の歌にみなど川みづくかばねはさうしても魂はよしの宮まもりけむ)猶父の魂の子に託りて

志を繼がしめたる例古今に多かれとも重ねて云ふべし

説教主要四箇目再論

講録第六拾一號に擧げたる説教四要論に云へる着自体裁學術語言の四要の目を再詳に云へし(本編には四要の上をのみ云ひた四箇の目を細しく云ふれば)は四箇の目を兵事に比喩したることのみ詳に云(先四要を兵事に比喩すること左の如し

- 着目は 廟算の如し
 - 体裁は 隊伍の如し
 - 學術は 糧食の如し
 - 語言は 兵卒の如し
- 着目を廟算の如しと云は將帥先軍を出さむとする時祖先の廟所に於て敵と味方と勝劣

を校合するを廟算と云然るに説教の着目は土地を量り人情を察し時勢を考ふるに土地人情等は彼にありて敵の如く其土地に應じ聽者に依りて説く所の見込を着るは此にありて味方の如し此敵味方を比校するに似たり若此見込を誤る時は聽者をして感動せしむること能ざるは廟算を誤る時は百戦克こと能ざるがごとし

体裁を隊伍の如しと云は隊伍の士卒を組みて隊を必ずを云其組みたる隊は或は分ち或は散らし或は復組みたるまゝ堅に進め横に開き自在に變化するものあるを其變化は敵に應じ地理に従て變化すること説教の体裁は各種ありて土地聽者に依て能應する所の体を用ること隊伍に各種の變化あるに似たれば也(或人云土地聽者に應じて見込を變化するは甚不見識也吾定る所の見込を以て主張して貴賤都鄙を分す推して説くへしと云此説論は高尚に似たりと雖も實際に試みて甚不可あるを知るべし抑聽者は病者の如く説教は藥法の如し百病何り一法を以て療するを得むや或人の説の如きは地理を察せず敵情を量らずして暗愚の將己が暴勇を頼みて一の陳法を以て百戦勝を得むと

欲るが如し倖にして終に勝ごともあるも味方の兵を傷ひ時日糧食を費して後幸して一勝を得るものごとし思ざるの甚しき也)

學術を糧食の如しと云は糧食は兵卒の命脈を保ものにて良將地理を得曉勇の士卒を組みて隊と爲るとも若糧食足らざれば戰ふこと能ず説教者の學術あまは甚手弱くして着目は適當し雄辨は具るといへども貴賤をして歸向の心を取と難し學術のなまもの知り一所に於て數月の説教をなすこと能ざるは糧食不足して永陣を張ること難きに似たり然れば糧食は軍の資本學術は説教の資本の如し然るに方今神道教職を見るに學術あるものは概して説教に拙く(學術ありて説教をなすもの己が知る所に三輩あれども其体裁甚良からず)又説教を得たりと容れたる者は皆學術に甚乏しきものと云はざるを得ず偶學術ありて説教を得たるも其着目に於て同職の論合す此教導の振ざる所以にして歎すべきの甚也

語言を兵卒の如しと云は廟算に必勝の見込ありて殿に隊伍を組み此に加ふるに糧食

足るといへども戦ふ所の士卒微弱なるは假令は経緯に弱き糸を織れる布絹の如く弱卒を組みたる隊伍を以て戦ふ時は敵陣を敗ること難し説教此に同じく土地を察し時勢に通じ着目立ち体裁整ひ然のみならず學術具ることも言語滞り辟氣活潑よく聴者の肺肝を寒からしむるの辨なくは着目体裁學術も用をあるす畢竟着目をして着目の如く適當せしめ体裁をして意の如く整へしめ學術をして能活用せしむるは皆語言の爲所なれば語言を練習すること説教者の最主要たるもの也

富有

萬葉集十八すめろさの御代さかえむとあつまなるみちのく山にこかね花さく」こは續日本紀に天平二十一年丁巳陸奥國始貢黃金」とある時のことあり此御代榮むとこかね花さくとあるにても金にあらざれば御代も榮むざるを思へ又神世に須佐之男命韓國を巡り見なはして曰韓國の島は金銀あり吾兒の所御國に浮寶あらずはよからし

と宣り給ひし浮寶は船のことにて船を造り彼國を取りて金銀を買せしめんとの大御心なるを思へばこれも猶金銀あくは國は榮えざるものなるを以て如此は詔ありける也地中に火水ありて脈をよし金氣ありて其土地を固結せしむるものにて土中より發生する食物中に鐵氣を含有して其精液血に入りて身体を健康せしむる功あり（西人精醫の説）凡金屬の世の至寶たるや耕具食具伐木具兵具船車具諸器械鐵にあらざるはなし又萬國の通貨皆金銀を以てす唯品物の價を表する爲ならば木竹を以て作り紙を以て製するも可あるべきを必金銀を以て爲るも則金銀の貴き所以なり山は金山を以て山の最とし國は金あるを以て貴きを得人は金あるによりて志を得べし然るを金銀を貴しとするは卑俗として清貧を樂むと云は世に云貧者の負借と云者也支那の古へに用ゐられざるもの山林に遁れあごしたるは有徳の君子とする慣習ありて富貴を願ざるが高尚なる志のごとく思ふは人情の自然に恃りたる僞事あるのみ金あらざれば國益を量り人材を教育し或は貧にして孝養あるものを教ふこと能はず志はありても爲こ

と能はざるは十中の八九金あらざるに依るものぞかし西京本國寺の域内に福大明神と云小祠あり今より五十年計りにもやありけん住僧思ひけらく我地内にある神を何神におはしますとも知ざるは本意なきこと也我未福大明神といふ神號をさかず直ちに拜し見むとて一年祠の扉を開き見れば唐制の衣冠を着たる木像のいとふるびたるかあり猶祠の内を能見れば古き棟札あり取たろして見れば從四位下木工頭紀貫之の十字見わたり(貫之の四位に昇りたること史には見えす)此より紀氏を祭る祠なることを人知りぬとなり然るに紀貫之在世中に纒ある食封を給りて富有ある人ともおもほはず然して福大明神と稱し來しは恐らく貫之生涯貧なるを憂ひ貧にして志を遂さる世人を恤みて吾死せば福を守らんと云ひしこともやありけむ故に世人福大明神と稱して祭りしものあらむと或人のいひしは然もあるべし(世俗に此類ありて東京淺草に痔神と云祠ありこは甚く痔を惱みたるもの、我死後に世人の痔を守らんと遺言して死たる人の靈を祭りたる由又日蓮宗の僧日朝といひしは後盲目になりて眼病を守らんと云遺しぬとて

今この僧の像に眼病平癒を祈る者多きは即福大明神の類なり)此一編の主意に就きて源頼光は鎮守府將軍經基の孫にて滿仲の子也英武世に冠たり圓融花山一條二條後一條の五朝に仕へて忠勤せり頼光左馬頭にて内の昇殿を聽さる東宮大進たる時狐の殿上に臥居たるを皇太子頼光に御弓矢を賜ひて射落さむことを命せらる頼光辭て曰臣弓馬の家に生れて壯ある時少しく之を嗜むといへども久しく文官にありて弓箭を取らずとて碎しけるを頻りに命を下さるこゝにおいて頼光庭上に立ち袖をはらいて弓に矢番ひて切て放て狐の胸の真中を射て屋上より落つ皇太子大に賞して寮の御馬を給ふ頼光拜謝して曰此臣は射藝の功に非ず唯祖先神祐の力を藉るのみと云(今昔物語を取る)頼光射術に誇らず一回之を辭して許れざるによりて射術を顯といへども祖先の神祐云々の語を以て謙遜したるにても其人とありを見るべし又頼光其弟頼信の宴に赴く一人を厩に繋ぎ置くを見て彼は何者ぞと問ふ弟頼信答へて彼は賊鬼童丸といふ者也と云頼光曰鬼童丸の名兼ねて聞けり彼は普通の賊にあらず殿に縛すべしと云是以て鎮

を以て之を繋ぐ鬼童丸大に之を恨み遂に鎖を絶切りて遁れさりし頼光の歸途を伺むとす斯て鬼童丸市原に至り野牛を殺し其皮の内に身を匿して頼光を殺むとす頼光野牛の臥たるを見て奇しむ所あれば從士源綱をして之を射しむ鬼童丸跳出て不意に頼光に切掛る頼光刀を挺て立所に之を斬る英武思ふべし又寛仁中皇外祖母京極第を改造せしめらる此時頼光其器用を進るに凡家中須用する所の物悉く備り其精巧を極む藤原道長公甚之を馳をると云（小右記を取る）又或時關白兼家公二條京極第を新造せらる是秋河陽の妓を召して酒を依け米絹を以て妓に給ふ當時の宴集の盛あること未嘗てあらず時に東宮大進源頼光良馬三十四匹を引きて賓客に願ちたり衆客甚驚歎すといふ（同上）馬三十四匹を當日の引出物とすること容易のことにあらず頼光弓馬の道に達し且富有を極めたるは實に全備の人物といふべし一人の上にてもたとへ英武にして博學なりといへども富有にあらずれば爲ことを得ず一國の上にても其國の寒暖氣候よく土地開けたりとも富國にあらずれば國威を張ることかたし然れば貴きものは金銀の

多からんが人も國も貴きものと云ふべし學者流の論は實際に用なきものあり

感小至大

天地之遠我如日月之長我如臨照難波之宮爾和期大王國所知食之御食國日之御調等淡路乃野島之海子乃海底奥津伊久利二艘珠左盤爾潛出船並而仕奉之貴見禮婆此歌は萬葉集卷六に載せて養老七年十月難波行幸の時の歌なり（元正天皇）此の意は天地之遠我如日月之長我如の二句は天皇を賀き奉りたる詞奥津伊久利は海底にある磐を云（伊久利は栗に似たる石也と云説はわろし其由秀成が著したる古言類韻に云へり）艘珠は唯艘のことを云潛出は水を潜りて艘を取出るを云貴見禮婆とある貴きは美稱したる詞にて見禮婆者云残したるに餘意を含めり其餘意は海子の身のかく日の御調に勵精するを見れば天皇の稜威の御盛にましくして諸臣の其職務に勉強するを思はるゝ由あり人心の物に感るは一小事に勵きたるが始めとなりて遂に大業をも爲すに至ることあるもの也

この歌の如きも縁に海子が仕へ奉るを見て廣く諸臣の上に及したるも則ちの意にて見一葉落知天下之秋と云は是也然れば人は物に感る情篤からざればあるべからず昔山本勘助兵書を講しける時末席に少年三人聽居たり其三人は小宮山助太郎小山田八彌秋山友一郎也小宮山は一向に沈りて能聽居小山田は笑て居秋山は中ばに坐をたつ此時講終て山本曰小宮山は誠忠の者とあるべし小山田は臆病の者とならん秋山は不忠の者とあるべしといひけるに果して小宮山助太郎は(後内膳と稱す)天目山にて勝頼に殉死して忠を全ふし小山田八彌は(後には左衛門と稱す)武田家の亡ぶる時逃去り秋山友市は(後攝津守と稱す)織田家に降りけるが織田家にて累代の主家に背きたる者として斬られぬ小宮山の如きは山本の講説に感る所あるをもて謹て能聽きその感情は成年に従ひて益深く肺肝に染みて終に誠忠無二の人物となれりしもの也他の二人は感銘する所なければ良知は埋れて性善なる心を失ひたるものありけらし又毛利元就の臣熊谷兵庫助信真といひしは中國第一の士大將にて大身なれば何事も闕ることなき身

あるに一人の女のいみじき醜女にて人よびて熊谷の化物娘と云までありければ年は二十に餘りたれども嫁することあしあへずして猶親の許にありける時信真夫婦さし向ひて曰我がくまで大祿の身となり武名は近國に輝きておもひおくこともあきまものあから一人の女の今は年頃にもあれども縁づくべき便もあきは此のみ我上の一の不幸と云ふべしかつ女の心にも我等あき行末心細きことあらむも痛はしきことなりとて熟々と女の上を歎き語りける折節取次の侍來て唯今元就侯より御使の由にて近臣の人参られぬる由申す信真これを聞き何事やらむと客間に通し衣服を改め應接す此時使者云ふやう只今御使として某参りけるは他の義にあらず御次男元春君より御年頃にあられければ元就侯の思召にも元春君御配偶あらんことを御心にかけて給ひて宣ひけるは元春にも早く妻を迎へて遣さむと思へとも若き者のことあれば自然密に心中好む者あるまじきにもあるへからず汝元春が意中を問へしと命せられければ某元春君の側に参りて此由申けるに元春君宜ふには我別に臨む者とてもあし然れども父君のさほと思召し

とならば熊谷が女を妻に申受へしと宣ふ就て足下に對して申悪き言なれども某御答申には信眞が女の事は御聞違ひにもやあらむ彼れは美しからの者の由申上ければ元春君重ねて宣ふて熊谷が女は家中第一の醜婦あることは我兼て聞けり然るに美人娶らんと望むもの多かるべきを醜婦は望む者もあく縁付がたきもの也熊谷は采配取て天下に知られたるものなるに一人の女容貌見悪くして縁付もあきは氣毒至極也衆人の望ぬものなれば我婚らんと思ふありと宣ふ此由元就侯に申上ければ然らば汝信眞方へ参り申傳へよとの命を蒙りて参りぬと云熊谷涙流して承りぬとて答へつつ思ふやうさきに女のことにて夫婦愛ひ談らひけるを元春君のかくまで思召るゝは實に身に餘りて忝し御志は骨に刻りても忘れがたしいかで此君の先鋒とありて堅陣を破り元春君の功になして此恩義の萬分一も報いむと思ひけむ毛利家大に中國を治めたるは熊谷が功其中にはあり其本は此感情に依てたこるもの也(近世名臣錄)又後醍醐天皇隱岐國にたはしましける時或夜月明らかなるを行在の端近く出させられて都の空懸して御盛にま

しつて昔をしのばせ給ひつゝ御庭のあたりより遠く望ませ王へは篝火は燃去り番兵共は怠りて肱を枕とし甲を着たるまゝ倒れまごしてある中に一人の武士胡床に腰打かけ傍目も觸れず守り居たり天皇見をなはして彼は誰ぞと問せ給ふ御側に侍る者彼れは佐々木の一黨にて富士名義綱と申すものなる由奏上す天皇きこしめして春猶夜寒なるに勤勞のこと也御酒の下しを取らすべしと宣給ふ義綱はかくともしらす守り居たる所に官女大御酒を盛たる瓶子を捧げ來りてまづ御言の由を申す義綱驚き胡床を放れ大地に打敗きて承るに義綱の宿衛を勞ひ給ひて春寒を凌む爲め大御酒を給ふ由云ひて瓶子を渡して去る義綱人しれず涙を流してかゝる仁君を今日まで苦しめ奉りたる畏さよ名は宿衛といへども其實はこの行在所を通れ出給はむ防ぎに關東の命を受くるは順逆を違ひ大義を失ひたる事なりけりいでや今よりは志を改め勤王の誠を盡さむと其次の夜行在所の御庭にしのみ官女を以て甚も切に赤心の趣を陳べ密に此島をいで、雲伯の義士を集めて御迎に参らんと奏して伯耆國にわたりの(秀成がこしをれに大君のお

しらの御酒にもものふの赤き心はほにいでにけり。此も義綱この大御心に感動して逆をすて、順に歸したるに其本は唯御酒一瓶に依るなり人の生命を保つ所の食物をはじめ寒暑を凌ぐ所の衣服皆天皇の給物に依りて存在するものあるを思へば唯一瓶の御酒の給物は小ありといへども其小ある所の感動にはじまりて一日も欠くべからざる物悉く天皇の給物なるを知り皇恩の忝きを知るの大にも至るものなり海子の日の御調に奉仕する小を見て人として天皇に仕へ奉らざるものはあるべからぬ大を知るに至るも此理也。

食者天下之本

宣化天皇詔曰食者天下之本也黄金萬貫不可療餓白玉千箱何能救冷とある詔のごとく食者人の生命を保つ所の本にて其本は大氣津比賣神の御身より成出けるを天照大神之を天の御田に植しめられて皇孫命の天降り給ふ時其種を大

御神の授け給ひたるか如くなることを知るべし（悉しきことは已が著したる稻名考にいへり）然れば古より年毎の二月四日には祈年祭行れて十一月二十三日には其新穀を神達に奉り給ひ天皇にもさこしめし諸臣にも給はる例はあるなり又清凉殿には農事を齎きたる御障子を設けられ近くは明治九年六月東北御巡行の時は所々にて御筆を止めさせられて田植を見うなはしたるなどすべて農民の此業に努くことを見うなはし知ろしめさん爲也故に方今内務省中に勸農局を設けられ専農學を講せしめらる上件大概述る處を以ても農は國の本にて農民は民の本なることを知るべし一舊政府の俗吏の農民を賤しめて百姓どもあごひ或は都下の俗見苦しき田舎者又愚なる百姓もど輕蔑するは己れ等が生命を保つ所の大本の業に辛苦する至重の民なることをたもはざるなり）江家次第赦罪條檢非違使の仰する詞に各罷遺本貫重犯不奉仕爲公御財一御調物供進禮止ある公御財といふは萬民をいふ言なれども専らとは農民をいふ言に用ることこの文にても知るべし然れば農民は國の爲天皇の御寶と稱へいふものな

り抑人の爲す業は其本神祇の初め給ひて人に授け給ひ人は其末を補ひまつるものにて百般の業一事として此に違ひたるはあらざる中にも農業は殊に本末を神人に係けて見るに足るもの也そはまつ米作る業の一を以て云ふは稻種の本は皇御孫命の天祖より授り給ひしが蔓延したるものにて夫れを水に浸して苗代に播きたるを造化神また火水土の御築えしめ御年の神守りまして生ひ立しめ給ふ其末は人必らず之を田に植へ手脇に水沫並垂向股爾泥並寄氏(祈年祭詞)千辛万苦の事を以て米と爲して生民の命を保たしむるにて農事計り正しき業はあらず(農家に生れたるもの、其勢力を厭ひ其状の賤く見ゆるを嫌ひて農を捨て商に轉し或は遊民などに落入る類あるは一人耕さざれば萬人餓るを思はざるもの也)然るに春秋に不意暴風雨起り或は時として震雷大に人の肺肝を寒からしむる天地の變あるが如く豊年に凶歲あるは天理のしからしむる所にて人之を能することあたはず唯其凶歲に遭ひて其難を救ふの術なくばあるべからず故に古へ義倉を設け民を上戸中戸下戸の下に又上中下戸ありて合せて九戸に分ち其等に

従ひて毎戸必穀を出さしめ之を蓄るに義倉に收めて凶歲に當りて飢餓を救ふの法を立られたり造化神より此を生つけ給へることは仮令は角あるものは牙あく牙あるものは角なきものを生みつけ給へるは其角と牙とを以て身を守らする爲也人は角もあく牙もなく良智を受けて其智を以て身を守らするもの也然れば已が智を以て豫め災ひを防ぐへき者也然るを豊年にして穀多く得たるに心緩みて此を蓄ふる心なきは愚あること也牧野の馬の夏日の間は樹陰に草を食さるは平原の草の霜に枯れぬる後に食はむ爲の蓄也其他猿の木の実を蓄ることあり又山に高山中山端山の三あり中山は樹の繁るをもて山の主として人家の材又薪木に充つ端山は草の茂るをもて山の主として人家の屋根又牛馬を飼ふに充つこの中山の樹端山の草皆人の爲に蓄ふものあるに高山は草木立たず何の用ありとも見ぬものながら高山は氷雪を蓄へて夏日諸川の涸れて田水を欠くに至りて其氷雪を次第に解融して谷に注ぎ川に流して(此れ水分神の守り玉ふ所なる事祈年祭の詞にてしるへし)田水に分たること仮令は倉廩に穀を蓄へて凶歲に當て

之を明きて其災を救ふものに似たり然るに之を一時に解融せるときは諸川洪水を
 して之か爲に却て災を蒙ることあれば造化神氣候に順次を設けて次第に解融するは
 猶天理の百般の事に涉らざることなきを知る一端あるものを猶云はば春日發生の設に
 冬日草木の性を根に蓄へ又萬物を育養する設に水蒸氣の本を地中に蓄へて雨とす
 と皆造化神の動物の爲に物を蓄ふる神徳あるをよく悟りて農民は必豊作に當りては
 別て之を蓄へ置き凶歲不慮の急を救むとせずばあるべからず宣化天皇の詔に食者天
 下之本とあるを心に認て黄金萬貫不可療飢とあるを忘るまじきこと也

此一卷は岐阜縣令の依頼によりて管下に諭す爲同縣神道事務分局役員の請に依て編
 する所

事實

即爲二字伎由比宇那賀氣理氏至今鎮坐此は古事言の文にて大國主神須世理毘賣命の妹

姪爲給ふを詔ひて倭國にいてまゝむと爲給ふとき御歌よませさせ玉ひて即御馬に
 乗り給はんを爲給ふ時御后命御歌をもて答へ給ふによりて大國主神の御心とけ給ひて
 男女神の陸ひ給ひしにつきて記者の副られたることを至今といふにて知るべし期て鎮
 坐ぬとあるは古事記を編み給ふころ此二柱神の願係りておはします御像の世にある
 を以てかくは副られたるものあるべし此時の御狀を像に作りて世に残したるは夫婦の
 交際の教にもなし又夫婦の上を此二柱神に祈らん爲あるべし(或人の説に今もこの
 狀の像を上野國などにて伊邪那山伊邪那美二柱神の御形と云傳へて祭る處あれども
 恐くは大國主神須世理毘賣命の御形あらんと云へるはさもあるへし)此に就きて云は
 い神達の御事跡を後世言に擧げて説くものは此二柱神の御形を作りて廣く世に示す
 に似たり仮令は神達の御事跡は圖画の如く其御事跡を説くは圖画の其所以の説を副へ
 て圖画を解するが如し或は人形を遣ひて手足を働かするに淨溜璃を副へて其働く所の
 所以を知らしむるが如し又政体を傍より翼賛して説くも此に同じく仮令は政治は人形

遺の人形を遣が如くこれを説くは淨溜璃を副ふるが如し然るは政治は云云の所以ありて云云と處置せられ云云の改正は云云の所以ありと一々之を辨解して布告することあれば教職傍より之を演説するは則政治の画に画説の詞を副ふるものごとし元龜の時尾張國小牧山に徳川織田兩家合して豊臣家と對陣せし時樂田羽黒等の戦に豊臣方利を失ひしがば一策を設け道を回りにて遠江國濱松の方に兵を入るへしこれを聞かば徳川の兵必ず遠江國へ引揚ぐべし其時豊臣大兵を以て其半途を打へしと謀りて森池田三好等の兵長久手を経て遠江國に入らんとす此状を見て徳川家康自ら井伊榊原等の兵を率ゐて小牧山を發し長久手に於て池田森等を討つこれをさへて豊臣大軍を發して徳川兵の森池田を討て大に勞を取れる所討へしとて進軍するを見て小牧山に残りたる本多忠勝思ひけらく今日長久手に於て有名の剛將森池田の討死するまでの戦われば必味方大に勢すべし然るに此時豊臣の大軍急に進んで其勢兵に迫らるゝに於ては必定味方敗軍すべし主君の爲一大事也と終に三百の兵を以て龍藏寺山の麓を進軍する

豊臣の十萬の兵を姑く喰留むと忠勝急に小牧山を繰出し豊臣の兵に討てかゝる豊臣の兵此を見て大に憤り味方に人無き振舞かゝる小兵を以て此大軍に打掛ること首語に絶えたること云ふべし數千の大小砲を以て打すくむべしとて悉く砲を取直さんとするを豊公旗下備より遙に之を見て今忠勝の進み來るは此大軍を破らんと爲る意にはあらし自ら一命を抛ちて暫時進軍を滞らする内には家康小牧まで引揚ぐべしとの見込にて主人が爲に一命を抛むとする也主を思ふ志甚愛すべし大小砲を以て打すくめむことあるべからずと先手に下知して物別にありけり(俗書に此時本多忠勝加藤清正組打せる由いへるは甚しき誤也)此本多の爲す處は画の如し豊公の其意を量りて述べられたるは此に副ふる画説さといふものゝ如し都て教訓の語は能人心に感徹せざるものにて事跡の談の大に教語に勝ることあり故に元龜天皇の頃武田家等にて陣中に話衆と云者を召具して長陣の時軍士に古戦の話を聞することあり然するは長陣になれば兵卒自然妻子を思ひ故郷をしのぶ情たこるものなるを古戦の話を聞くときは勇氣振ひ

起りて今にも戦はじまらば古への勇士にも劣らぬ勳をなさばやと思ふ心になるが人情の自然なれば也然るを大將令を下して士たる者は必一番鎧を爲よ殿を心掛けよと云のみは教訓の語に似たるものにて士卒の心にはさまで徹せざるものなるを古へ義を思ひ恥を知りたる武士の功を立たる物語を聞きては已も劣らじと思ふが人情なれば事實の談は人心に感徹すること深きものあることを知るべし然れば神達の御事跡に人皆をして神習はしむるが古への教也寛文の頃士井利隆（士井利勝の男）と云しは短慮の人なりしが野村大助と云者意に恃ることありとて呼出して手打せんとす此時近習の者甚困して家老大野仁兵衛出来て利隆の居間の次に侍する近習の者に向ひ日長の詰番至極御大義あり拙者近日見たる書に甚感心致す武邊物語あり武士たる者必聞きおくべき話ありてや物語して聞せまらさむと云近習者は彼大助の手討になるべき際なれば軍物語を聞きて居る時すら速に君を諫め給へといはまほしかれども家老といひ老人にて一家中重く用ゐる仁兵衛の事なれば然もいひかねて黙して在るに仁兵衛上座に

直りて説きいだしけるは昔家康公三河にたはしける時一向宗徒の叛きける時漸其徒の破けるに其徒に加りたる夏目五郎左衛門農家の板庫の内に隠れたり然るに味方大勢此庫を取圍みて此庫に火を放ちて累代の主君に叛きたる爵を思ひ知せん爲焼殺むとて立騒けり折しも家康公馳せ付き給ひこれに隠れたるは誰れぞと問せ給ふ夏目五郎左衛門ある由答ふ家康公仰せられけるは五郎左衛門は誠忠の者にて戦毎に身命を惜ざるもの也こたびは宗旨の爲に一時方向を誤りたりといへども彼が常の志をおもへば率公二心なきものあるをかゝる者を焼殺すことあらば弓矢の神の神罰も恐るべし彼をば助け遣すべしと宣ひけるを五郎左衛門庫の内にて此を聞き涙を流して思ひけるはかゝる仁君に叛き奉りたる後悔臍を噛むとも立復りがたし然しながら何れ時かあるべし此の君恩報い奉らではあらじと思ひけるがさてこの事竟て後間経て引馬野の軍（後に云味方か原）ありける時味方大敗軍にありけるに家康公は御馬を進められて御討死あらんと爲給ふ時馳來りて御馬の口に取り付きたる者ありて今こゝに於て御討死あるべき所

にあらす恐多かれども其御名を犯して敵を支へ申さむ君は濱松へ揚させ給へとて御馬の口を濱松の方へ向けて鎗の柄を以て御馬の三途を打ければ御馬は飛出して濱松の方へ馳せぬ雖やらん願給へは夏目五郎左衛門にてありけるが踏み留りて大音揚げ徳川家康今討死す我首取りて高名せよと名告りつゝ討死す云云と談りおきて仁兵衛は利隆の前に出て云はく野村太助御心に叛きたることありて御手討になるへき由なれども彼れは助けおき給へと云ふを聞きて利隆然らば免るすへしと答へてこのゆるにぞすみけりこは若し仁兵衛直に利隆の前に出て種々教訓の語を引きて諫むとも容易に利隆の心は解けしを彼次にて物語せるに利隆の心解けて今大助を助けおかば夏目五郎左衛門のごとく我馬前にて討死をもするものとあらむと開悟せるまゝにかくたちまち免したる者也これをもて教訓の語より事跡の談によく人心は感動するものなることを知るべし本文に擧たる至今鎮坐とあるをたもへばいさめてよき事跡を形になして人に示すことも古きことにて倣き人の事跡をも政の上をも言に擧げて翼賛することあはくはあ

へからず

説教四要論

此編は同僚に對して異見を述べたる一編にして聽者に對して説諭する意あらず然るを講録中に加ふるは素此一百號は都て首號にも云へる如く臨席控本の爲ならずして初學講師を作る料且説教の心得を述る主意されはあり

総論

説教に四個の至要あり着目体裁學術語言是也着目は時勢人情を察して説教の見込を立るる云体裁は主として講する處の題に従ひて其体裁に變化あるを云學術は説教の料に學ぶ處取捨あるを云語言は連語の脈絡波瀾抑揚の活機緩急の度等のあるを云此四の者一も欠くへからず相供らざるべからず兵事に比喩すれば着目は將帥先づ敗勝の理を察し廟算爲る者の如し体裁は隊伍を整るが如く學術は糧食を蓄ふるが如く語言は兵

卒をして強からしむるが如し然るに着目を以て最要とするは体裁を得學術に富み且雄辯を具ふるとも着目を誤る者は仮令は隊伍整ひ糧食足り兵強しといへども將若し勝敗の理に暗き時は勝を得ざる者の如し体裁之に次くは仮令は將能く勝敗の理に明なりといへども隊伍整すは敵に當ることを得ざるが如し學術之に次くは隊伍整ふとも糧食足らされは兵力保たす一も戰ふこと能はざるが如し語言之に次くは仮令は彼三者其宜を得るとも兵卒強からされは堅陣を破ること能はざるか如し是以着目体裁學術語言を説教の四要とす

着目

着目は我徒の見る所區々ありといへども今の時に方りて今の人民をして本教に依らしめむと欲する者は姑く今の人情に應じて能時勢に適するの他に出べからず然るを時勢に反する者は炎暑に温食を衒むとし寒夜に冷物を強むとする者の如く自然人心に忤ふ所なきこと能はず抑時勢の然る者は則ち其源幽府の慮に出るものにして寒暑の運行し

風雨の變をなすに比しく人為の能くするものにあらす寧ろ人力の之に逆ふことを得べくむや然るを時勢に反る説教あるを以て識者は之を度外に置き無識者は屈して聽くことを欲せず彼劇場の如きも結局に至て悪人亡び善人榮ゆるの應報を示すの他あしといへども姑其顛末を包藏して悪人惡を逞うし善人災厄に苦む情態を示し觀る者をして其心を勞せしむるの巧あるを以て世俗好て觀る者多し今吾徒の説教素より神德皇恩の忝なきを説くの他あしといへども初より直接顯露に之を強むと爲る者は序段より悪人退けられ善人榮るの形容を見するが如し此の如きは恒の順ある者にして誰の此を珍らしとして觀る者あらむや又此を兵事に仮令は未だ敵軍遠きに在て銃を治め劍を振て切入らんとする者の如し其切入らむと欲する者は必先銃隊を進めて其間の切迫近を取り以て切入ねばあるべからず姑時勢人情に従て説き起すは銃隊を以て敵に近づくが如く説き至り極に臨みて終に我本教の眞面目を露すは敵陣に切迫して初めて劍を執て勝を奏する者の如し是以聽者時勢に應ずるに誘れ人情に合へるに引れ余念を失し我を忘る

の極より知らず知らず本教の域に誘導せらるゝに至る然して着目此にありといへども
 も体裁の宜く語言の熟する此二の者相輔るにあらざれば此着目の意の如く施すこと能
 はす不肖秀成數年皇典の端を窺ふを以て業とす寧んり本教の至要を傍にして時勢に媚
 るの意あらむや惟他人の説く處と大同小異あるものは其主要を先に爲ると後に爲るの
 差あると或は之を直接に強ると含蓄して自然に依しむるの違あるに止るのみ之を直接
 に強る者は未だ勝算を得ずして暴かに正面より打つ者敵若堅くして動かざる時は却て
 我兵を殘はるゝの弊あるが如し含蓄して悟らしめ又結局に至りて顯す者は奇兵を以て
 不意に出る者の如し此れ興へて後に奪ふの策或は弱を示して誘打つの類孫子に所謂能
 にして不能を示すものは是也兵の道は勝を後に爲るを貴ふ布教の道は終に歸向を取を主
 とす然れば誘導の始に在ては時勢に應じ人情に合せ或は隱に含蓄するものも全勝を得る
 に至て其功を奏するが如く終に本教に皈向せしむるの後初めて時勢人情より導きたる
 實功を見るへき者也然るに若し浮屠氏の如來の利益を説くに倣ひ或は温古の志あるも

知新の眼を具へず徒らに一小姓事を聞て之を皆神異に託つげ神明を銜賣して神徳の廣
 大あるを偏小なる物とあし俗神道者流に擬似するの末開頑固説を爲す時は眞に大道を
 信する者は必忌避せざるを得ず既に福岡縣神道事務分局開設の時縣令渡邊清の祝文に
 曰自今以往彼浮屠氏の徒らに前世の功徳を設くに倣ふなく此神道者流偏に現世の神異
 を唱ふるに慣なく正に朝意の在所を認め云云以て我帝國を萬世不朽に維持せば所謂政
 教一致ある者正に始て其實を見るべき也」と(舊教部省布達にも此主意ある數々あり)
 他の地方の意も推て知るべし人民を教導する者人民所轄の官吏の見と氷炭の違あらは
 孰れか地方の教導の行はるゝ所あらん然るを或説に政治は生前に關し人民を治る術の
 み教法は政府に頼るへき者ならず教法は専ら幽冥に係り死后靈魂の皈着する所を求る
 にあり」と云所の如きは外教に倣ふものにして政教一途の意に反す外教は素より政府
 に離れ動もすれば抗抵の勢をますを我教導は朝命を奉し其職に補せられ主として政治
 を裨益翼賛するものにて彼と此とは霄壤の異なるあり或説の如きは朝旨遵守の教憲に

悖れり豈之を取らむや然れば教導者先つ朝意の在る取を認め自ら時勢に通し憲法律例を始め人民一日も知らずはあるへがらぬ所より説起して終に其源に溯り君臣父子の道の大古に起れるを始め今日世に有る所の萬物上に悉く神理を具へたるを明辨し以て造化の妙用天地間に充實する由に説至らむに誰か開化を妨るものとせむ然るを愚民の信を取るに有るも要路には益之を度外に置き卓識の者には彌之を輕蔑せられむには終に愚者の信も醒るに至ること必せり此着目を上文述る所に定むべき所以也

體裁

説教の體裁は千体萬變にして究りなしといへとも概する時は凡三体に過ぐべからず其第一体は姑く目して直論体とす此体は神典上を一偏に説き或は朝意を諭し或は顯幽分界靈魂販着等を説くに此体を用へし此体は語言を巧にせず連語に章を設けず形容語を放れ花麗の体に流れず實着を守りて説くべき体あり第二体は比喩体とす此体比喩を表にして裏に教意を含め或は趣向意表に出て聽者をして意外の感を引きしむるを主とす

此体は大率第一体の反對あるが如く言を巧に語に章を設け形容辭を表し前後の應る所連語に疊句對句をも取交へ聽者をして屈心を生ぜしめず假令は舞樂の耳目を樂しめて終に中心皈正の情を起さしむるが如きものあり第三体は事實体とす此体忠孝節義の談を主として事實上より導き入るゝ体なり此は言語の間能く貴賤老少の情を盡し其事實の詳細あるを専として應對動作の形容は盡るが如く容するが如く目前在るに比しく聽者をして或は憤發せしめ或は感泣せしむるに至らざるを要とすへし上三体は人々自得の体を以て力めて之を説く時は能徹底するものあり然れども此三体に熟して地理に依り敵に應じて吾兵の變化を取るが如く土地聽者に從て自在に變体するを習練すへし猶體裁論又修業の目的等は已れ漸に説教體論同拾遺を著して詳に述べたり故に今此に贅せず

學術

學術は皇漢洋に涉りて該博あるを可とするは論を待すといへとも能一人の力に諸科の

學に精なる者世に甚稀なり然れは一料専門の學に精ある上其他は一涉あるも難き者とすべし然れども神道教導に於ては神典に明ならざるへからず然して神典の見解に大に論まきこと能はず教導の科に充むには古語の言義辭格の用法の如きは姑く之を置き且諸家の説を折衷して精密に渉るが如くも猶姑く之を置き古傳の隨に私意憶斷を加へざるを主とすべし此等の説は教職中先輩の見も有るべし其可なるに従ふべし秀成持論を以て確乎助さざるものは着目体裁語言の三要あるのみ然れども秀成恒に憶ふ所無きにあらざれば其一二を擧て云へし然るは神典に相並へて能く讀むべきは萬葉集是なり此集は古人も毛詩に比たる如く此集の歌の如きは所謂真心を種として有のまゝに云出たるものにて後世の巧に偽り設たる歌の類にあらざ然れば上代の風儀の美しかりしことも人心の直く篤かりしことも當時を見るものゝ如し是以人心をして善に遷らしめ人情をして篤からしむるに引用する最此集に及ものあらじ孔子の時に云ふ云々と毛詩の句を擧て我語を興したるも此意あり然れば講題に此集の歌を擧て講し又説諭中

に引用するにも最も穩にして他の異論を來すことなかるべし然して歎すべきは我徒古に明あらんと爲る者多く今に通せむとする者少し故に古の令式等に精き者ありて今の法律等に精き者甚少し法吏法を掌りて法書を説く職にあらず是以て教導傍より此を俗解して人民をして刑に就しめざることを職掌の最急務たり然れば專此に努力せずばあるべからず又皇學の如きも時勢の變遷に従て其見解も又大に變易せずむはあるべからず皇學は寛政享和の頃精説開け文政天保の時大成爲たるに似たりといへども其説を墨守して今人に對して説むとする者は今に在て甲越の兵書を講し甲を着胃を頂きて戰地に趣むとする者の如し是以世に學者論學者根性の蔑語あるあり然れども今は要路の君子一人學者にあらざるはあし唯皇學太古の國と支那上世の域を出ること能ざる者と智識を地球上に求め能上古をして今世に取捨するの才力あるを以て其實を異にするのみ吾徒文明の政を翼賛し人民をして之に依しむるを職とする者深く此に注意せずばあるべからず

文章の好きは讀む者倦むことなく語言の好きは聴く者嫌はず假令は日本外史の如きも其事實に於ては誤謬なきにあらずといへども文章の好を以て讀む者卷の終を覺えず説教も又連語の大に熟したるを聴く時は其講の終るを恨に至る是語言に熟せざればあるべからざる所以なり而して語言の最たるものは連語中自然波瀾抑揚の具るにあり然れど之を更に設け爲す時は所謂作り物に成りて聞くに堪へざる体とある寧ろ平坦にして穩和あるには及す都て語言を主とするときは自然虚色に流れて深切の情を失する弊あり故に我子弟を教誡する情を以て懇切あるときは自ら其厚情聴者に應じて徹底するに至らざるを得ず此を目的として講席の敷を積むこり數千回終に熟練の極に及て波瀾抑揚の辯緩急の節も自然具り体裁の全を得始めて自在の極に至り我知らず新奇絶妙の辯も浮ひ出るものにて聴者は膝を進むを知らず感涙の流るゝを覺えざるに至るあり此他語言の論は都て已か著したる体裁論の拾遺に云へり今は其殘れると一二云のみ

山口に時めく花のいろ見せてくものあはたつたくにさそはん

説教問答

或問説教の日途は千緒萬端なるへけれ共其要は如何
 答先づ説出さむと爲る事は己か心魂に觸れて喜怒哀樂の情切ある極に至り其思想を直ちに言語に發るにあり己か心魂に徹せざる事を唯舌頭に係るのみにては如何に巧ある語を設け如何なる雄辯を振ふとも聴者の心は動かざるものなり假令は作花と云物は眞に迫るまで妙手を盡したるも見る人の心動かざるが如し
 問然らば音聲言語の間は何れにても關係なきものか
 答眞の花と雖 叢の中に交り咲ける花の如きは人心を動すに足らず櫻花の匂ふが如く梅花の薫るが如きものならずはあるべからず音聲に緩急の度を具へ言語に波瀾抑揚の節を調へてこそ櫻梅の色香に比しきものあるへけれ

問喜怒哀樂の語氣は如何

答喜の語は聽者をして悦の眉を開しめ怒の語は自然拳を握り牙を嚙ましめ哀の語は老少袖を絞らしめ樂の語は舞樂を見聞する者の快樂の心を生ずるが如くあらしむべし問說教は同一人の上にても其時により勝劣大にあるは何に據るにや

答時に依て勝劣ある原因は種々ありて一朝には述べたかれども先づ己が覺ある所を以て云はゞ席に臨み書に向ひて講初る際の二三行の間より一席の勝劣は生るもの也滯なく意の如く連語整ふ時は我ながら氣に障なく自然快をおほえて次第に氣合懸りて我と快く樂くなるまゝに其氣聽者にも自然應して徹底する者也然るに講初る時に讒かの滯ある時は氣合折けて一席共に其講大に劣るものなれば講し初むる時專注意して説起すべしこと也

問世に學者と稱せらるゝ人の說教を聽くに大方音聲に緩急なく然のみならず緩急あるも拙にして卑ありと駁るは然りや

答音聲緩急のことは近頃譯したる公會演說法と云ふものに云得たる論あり其書に曰人試に箏琴を取て彈せば絃數十三皆異様の音を發し高さあり低あり緩なるあり急なるあり以て能く耳に快き調を奏す若し此高低緩急の別なく齊一の音を發せば何の味か是あらむ徒に入耳を厭倦せしめむのみ今人の談話し演説するに方て亦此の別を立さるべからず若し然らずして徹頭徹尾同一の音聲を以てし高低緩急の其詞を整ふる無んば管に聽者の耳を厭からしむるのみならず又其口舌を疲勞すること甚速あるべし是音聲の忽にすべからざる所以なりとあるは實に然あり(此書粹なる所は大概己が嚮に著したる說教體裁論同拾遺と大同小異なるのみ其中身振等の説は甚取難し抑今世の人情全同說あるも外國人の説といへば之を信し内國人の説といへば信せざるはいと不審きことあり己か體裁論の如きも彼と大概同說といへとも教職中には取る者もあらむか之を今演說者流に見するとも信すまじきは必せり)問近頃行はるゝ演說會の其技に長じたる人ありや

答他所は知らず東京には己所々にて之を聞き又請るゝに從て自身にも席に臨みたることも數々あり然るに其論は好きも多かれとも言語に於ては未だ熟したるを聞かず上手と云はるゝも十人の中八九人は論詰する如く罵詈する如く音聲に稜角甚しく針を以て刺すが如く覺ゆる也故に聽者の情其説に答論せむと爲る意の自然起るものは其論説の必非なるのみにあらず言語音聲の間より生るの害なり(平日の談といへども詞に稜角あるときは不服を抱くへき主意あらぬ事も耳に障ることあるにて知るべし)問音聲は専ら高きが好さか低きが好さか答甚低きは數百人の聽者に達せざるのみならず活潑の氣を失して好からず假令は十合ある聲を七八合に發すべし然るときは自然穩和に聞え却て遠く徹する者なり持前十分に聲を發して忽ち疲勞を取り且其聲聽者の頭の頭上を通り過るものなり問説教にも對語あるべきか答短語にも又聯語にも又落着して再起る所の章段にも悉對を取へき處あり假令は

雪降の夕雨夜の寂き狀を云ひたる後は櫻の咲き乱れ春の曙の目覺き體を述べし勇士の戰場に蹈止りたる體を述べたる後は美人の燈下に打撓れたる體を述べし演場にも御殿場とか云花やかなる次の幕には其反對なる賤の男女の有様又は物凄き狀を任組みて見するを説教に此注意なきは粗なり問疊句に云ふへきところもあるべきか答切迫に云ふ處激に聞かする所は必同意の語を疊み係て云ふべし假令は如此眞理を誰か思はさらむや何れの人か信せさらむや尊さらむや等の如し問世人の疑ふへき類の事を論むとするには如何答種々論し方あれども自問自答を設くるも可なり然らば一涉り人の疑ふ所より一層上に出る疑を設けて明瞭に答ふべし假令は古典に云々とあるは甚以道理上に適す神世といへども如此ことはあるまじきことなり此所謂神代化物談といふへしや云置きて是れ一應然るべき疑に聞ゆれども實は未だ其理を究めざる所より生したる疑あり然

るは云々の理めるをかくても猶疑ふやいかにも「等論すが如し又比喩をも副ふべし
問比喩を取る心得は如何

答比喩は所謂近く取て譬ふと云ふが如くにあらざれば其詮さし比喩に取るものは上古
の譬は近世の事を以てし遠きは近きを以てし凡て反對なること或意表に出たる事を以
て遂に比喩とありて悟得らるゝに至るは最比喩の要なり

問説教に難と爲べきは如何

答難と爲る事多しと雖も甚善らぬは第一情を放れて理窟を並べ第二席中初終骨
稽を以て聴者をして笑せんとし第三多端に取廣げて結局の着る説をなし第四脉絡徹
らず何れの筋を講るとも分り難き辨をなし第五固陋にして時勢に反する説をなし第六
佛者の如來の功德を衍はむとするに類したる説をなし第七一小怪事を以て神異として
神徳の廣大なるを遍小なるものとあすの類其他枚舉に遑めらす
問上の如きは其元素何に因りて成れるや

答第一第五は學者の説教に多し第二は賣講者流より來り第三第四は辨を頼み講案に粗
あるより起り第六第七は俗神道者流より來るもの也

問然らば説教の元素は何に依りて成れるが善きか

答學力ありて篤く古を信じ能く時勢に通ずるを主とし正講の席敷を積みたるより轉
したるを第一とす

問上の説は説教一席に涉りての事也一言一言の間に難と爲るもの如何

答聴者を尊ぶに過ぎ又不見識なる語又は漢語を多く交へ耳遠き古言を述べ卑劣の語を
吐き神祇又は天皇の御事に係りて敬語を失し足利徳川等の如き大義名分に違ひたる人
の上を云ふ時至重の敬語を用ひ等する類猶あるべし

問聴者を尊ぶに過ぎ又不見識なる語等は概していかなるを云ふや

答聴者に對して各方又甚きは皆様或は申上ますと云類又不見識とは御退屈なが
らと云ひ甚きは御耳を拜借と云ひ又弊を撓むとて云ふことば此席には左様ある人はあ

るまじけれども云類（聴者の中に極めて無しとは何を以て見認たるにや若其席に其弊をしと見認る上は寧ろ其説諭を述ぶるに及ず素より説教を聞く愚夫愚婦に弊なきこと能はず然るを右の如く云ふものは畢竟聴者に諛ふるもの也）是等は皆落語家の風より轉じたるなれば甚卑劣あることあり

問音聲に高低緩急あり語には波瀾抑揚あるを音色の如しと蔑如する者あるはいかに
答音色とは俳優人の音色のことが俳優人貴賤老少の体を擬し言語にも此を顯す我徒の説教貴賤老少の音色を擬すは最忌むべしと雖も其心思と言語は必擬せずばあるべからず貴人は貴人の語賤人は賤人の語必あきこと能はず又緩急波瀾等のことは先にいへるが如し此論所開席上水泳を論するものにして實際聴者に對して説き試みよ論の如くして聴者感動することあらじや
問説教中に引用する物語に心得ありや
答心得甚多かれども先づ貴賤老幼の情を顯し其應對動作は目前見るが如くして忠孝

節義の情に聴者能感徹するに至らしむべし又賤人の上に係りたる卑事は殊に意を用て卑劣に落さるやうに説くべし又止事を得ずして男女の間に係りたることは殊に注意して淫犯の醜態の顯れぬやう説くべし又武邊の談は武器陣具都て兵事の名稱其時代を考へて説くべし然も軍談と云もの、擬似せぬやう説くべし

問近世の事實をば引用るは如何

答近世の美談を取出すこと必不可あるにはあらずといへども新聞紙上に記載せる如きは大方人も見て知れるのみならず新聞紙に見わたるまゝにては引用の談に足らず然れはとて大に粧色を加ふれば新聞紙上にて知れる者之を聴かば其作意のある所を信せずして終に他の實事にも疑を及すに至るべし上手と云はるゝ説教者に得意として新聞談を述る者あり或は草子の話を取出たるときもものあるは甚不見識にして大教を人々に説諭するに不似合あること也成へくは上代の談には及ばず若くは源平頃までに止るべし然れども元龜天正頃の武士の義氣の談には能取成して説く時は人心を感動せし

むることあり然しあがら此頃の武士は悉く大義名分に恃れる者なれば深く注意して説すんばあるべからず

問説教は難きものありや又易きものなりや

答甚難きものあり其難き事なるは韓非子難言篇を説教に合せて云ふべし曰所以難言言滑澀々華而不實とありて語言美はしく花やかある所を主とすれば唯言語上に流れて實のなき説教と思はる多言繁稱連類虚而無用とありて詞數多く聯語のみよく整ふときは聞く耳に滯るく達者の説教されども爲に成る所もく畢竟無用の辨とおもはる總微説約不飾不辨とありて有用の事のみあげて詞數少く語に章を設けざる類は不辨にして味も无き説教とおもはる親近深知人情借而不讓とありて手近く人情を穿ちて説けは無遠慮にして所謂探と云ふものに近しと云はる閑大廣博妙遠夸而無用とありて唯高尚にのみ趨りて所謂雲を掴むと云ふ體あるは切實ならずして用なき説教と思はる織計小談以具數爲陋とありて能行届きて所謂脱目あく小

事にまで涉りて説けばいと陋き説教とたもはる言近世映上とありて能時勢に通し朝意のある所を主とすれば政府に諛ふ者と思はる言遠俗詭譎人間爲麗とありて幽冥に涉りて説けば所謂化物談なりと思はる稱詩書道法徵古爲誦とありて悉く古書を引き上古の事實にのみ依て説くときは己が博覽を衒ものにして唯暗記の能きを誇る爲の説教と思はる此至非之所以難言云云とあり韓非だに如此難して難言の篇あり實は説教は我輩凡俗の謀及ぶべき事にはあらず

問説教は世に益あるものなりや

答吾徒の論を以て云へば本より大に益ありと云はざるを得ず故に吾徒の論を離れて云ふへし然るは洋人の言に世の四要なるものは政令學校説教新聞是ありと（此に云説教は外教の説教を指すは勿論あれども内國の上に取りては則本教の説教を取直さんこと論を待す）政令は萬民を保護して賞罰を掌り學校は藝文を授けて智力を擴くす新聞は時勢を知らしめ四方の事を明にす説教は政令の守るべきを諭し學校に就て智力を

擴むべきを勸め新聞論説に國體を駁し政體を誘るを辨し又新聞を見て能世態を知べき由を諭す是以説教は彼三要に渉るもの也類聚三代格卷八曰古之王者教學爲先訓世垂風莫不由此とあるが如し

問説教を得たるもの多かりや

答他の教法家は知らず神道に於ては一人もあることなし何にと云はゞ學者は其見固陋にして時勢に通せず説く所迂遠にして人心を動すに足らず无學者は只辨を頼みて見識卑く體裁卑く事實に違ひ術實神道といふべき口氣多し(かく秀成も則此類を免れず)今説教の上手と云はるゝ者十人にして十人皆無學者あり此本教の振はさるの一也

議論と實際は死活ある説

議論を先とする者は高尚には聞ふゆれ事業の上に着實あらず實際を主とする者は其見卑きに似たれども事業の上には着實あるもの也然れば議論は死物あるが如く實際は活

物なるが如し英人は實際を先とし佛人は議論を先とすと云へり學者の事務に迂遠なるは議論を貴びて實際を顧ざるが故なり議論を先とするものは信玄謙信の軍法に似實際を先にする者は織田豊臣二公の謀略に似たり信玄謙信の軍法は後世兵家の模範となりて所謂甲越二流の祖たり織田豊臣二公の如きは兵家之を絶則とするものなし然れども軍事に奇策ありて功を奏するに至ては同日の論にあらす此れ信玄謙信は格に入に出ざるもの織田豊臣二公は兵法の範圍を出て機に應じ變に處する間より妙策を出すものなり此れ信玄謙信の兵法は議論を主とするものに似織田豊臣二公の策は實際を主とするものに似たりとは云ふ也又繪圖を以て云はゞ西洋画は法に依り恰も眞物を見るに比しく支那画は怪物を見るが如く山水人物大小の量も法に依らず然れども西洋画は終日之を見るに猶活氣を生ることなし支那画は久しく之に臨むに山は雲によりて趣を變し水は風に從ひて波瀾生るかと思ふ斗り自然と活氣を生ることあり然れども地誌に加へ器械を圖しむと書籍中の事を補ふには能く法を守り大小寸尺の量を測る所の西洋画に

及くことあらじ死活を以て云はれ西洋画は死物にして支那画は活物也條理に依て義論を主とする者は西洋画の如く義論を遣きて實際を主とするは支那画の如しこゝに一の話あり或所の天井に鼠數多集ひて會議の席を開けり或人傍聴に出て之を見聞するに一の老鼠議長と成りて上座の床に着く衆鼠議員と成りて左右に列す議長衆鼠に對して本日之の議題を演へて曰第一條近時猫大に跋扈して彼れ權外を犯して我輩の權内たる此天井に及へり如何して此妨害を防むとあるに一鼠進みて曰某一策あり猫の眼を待ちて其頸に小鈴を着けむ猫我權内を犯むと襲來する時小鈴必音すへし其時衆皆四方より一猫を取圍みて我々未だ窮鼠にはあらざれども却て猫を咀むか又小鈴の音を聞かば各自を隠匿して能一身を守らむか此進退の二義は第二會に譲るべし先猫の頸に小鈴を着くる所の可否を本日之の議に決せむはいかゞと云ふ時又一鼠進みて曰某殿の御議論は最も不可なるべし然れども實際誰殿猫の頸に小鈴を附るを任とせらるゝやと云此論を聞て衆鼠座を立つ此時議長曰甲の議論は至極宜しきに似たれども乙の辨の如く實際之を用

ふることを甚難し何にとあれば我社會に於ては生を換へざれば猫に接近すること難しといひけりとかや（此話人の知る話なれど今文を直して云ふ）都て議論を主とするは此の話の如し又或所に酒店の主人夜更けて他所より飯らむとして我家近くまで來るに溝の中に人の落ち居たる状されは手にもてる燈を照して見れば一人の男溝に落入りて上りかねてあり必酒に酔ひたる人あらむと溝の岸に立ちて辛じて引揚げ見れば隣に住む星學先生ありけり酒店の主人驚き誰あらむとたばわしに先生にてありけるか何とてこゝには落入給ひしやと問へば星學先生答て曰足下我を救れたるは謝るに詞あしこゝに落入りたるは他の義にあらず足下知らるゝ如く我星度を測ることに勉強すること一夜も怠らず今夜空晴れたるを幸天を窺ひつゝ歩行するまゝに思はず落入りたる也と云酒店の主人曰先生天を伺ひ玉ふはさることながら遠き天を伺はむ先にまづ近き足元を見玉へと云ひし由（伊曾布物語文は引なほせり）學者今日の事に疎く時勢を知らず篤く大古の事は窺へども今日の事に迂遠なるは彼天を伺ひて足元を見ざるが如し唯

議論にのみ趨りて實際に行はるゝや否を研究せざるは實に此話の如し又秀成開ける事あり或所の市に益裁を賣歩行くものあり小間物店の主人之を呼びて松の益裁の價を問ふ答て某金と云主人曰此は山より取り來りたるもの也其本は山に生るものあるを某金とは甚不廉ならずやと云益裁賣其店に並べたる珊瑚珠を指して價を問ふ主人某金と答ふ益裁賣曰此は海より取來りたるものなり其本海底に生るものなるを某金とは甚以不廉ならずや我賣物と足下の賣物唯山海を異にするのみ也といへる由此等は議論を闘する者に似て共に人の辛苦を経て實際人の賞翫するまゝに自然某金の價位に至りたるを思はざるもの也學者の議論如此數妙からず都て範圍を脱したる實際に味ありて妙を顯すものあり元祿の頃にかありけん名たる俳優人に市川海老藏澤村宇十郎と云ふものあり或年大佛供養の演技をなす時海老藏は悪七兵衛景清となり宇十郎は富山重忠と成る然るに開場前に其伎を習練することありけるに景清衆徒の姿となりて長刀を挿込みて幕の外を通り過るに此時重忠幕の内より景清待てと聲を懸るに景清重

忠の爲に發見せられたるに驚き立止りて長刀を杖に突き後に振向く態をあす伎あるを日々習練するに重忠と成れる宇十郎が聲を掛る處景清と成れる海老藏の意に適すかくては驚き立止る情に至り難しとて折合す然るに開場すべき日限に至りければ止事を得ず開場す名人二人の伎ありとて初日より見物山をあせり彌景清重忠の段に至る素より折合あしければいかいあらんと演場に関する者は甚痛心せり然るに景清幕張の外を過ぎ花道にかゝるに猶幕内なる重忠聲を掛ることなし見物人も此伎は云云の伎ありとは知るもの多ければ重忠の聲を掛けざるを不審し演場に関するものはさてこそ初日であるに大に障を生じたりいかいはせむと氣をもみてあり景清花道の途中に滞るべきにあらざれば止事を得ず遂に花道を過ぎ其末に引ける小幕の内に入るや大喝一聲景清まてと呼ぶ景清思はず聲を掛られて眞に驚き小幕より半身を顯し長刀を取直し立て後を振りかへりたるは兼て設けたる手筈の死物を離れ意外の活物とありて眞に至りければ景清の狀を見て當時さこそありけんと演技を忘れて感せぬものはなかりきとあむ此は一

の卑事あれども都て設けたる範圍を出たる所に妙はありけり議論の死物にして實際の活物なるはこの一を以ても知るべし今世の青年輩實際に事業の成不成を思はず高尙ある議論にのみ趨ることまかれ

稱神名

景行天皇の大詔詞に大倭國者以行事負名國也こは高橋氏文久年中行事秘抄等に見わたる詔詞なり此詔詞は上は神代を係け下は千載の后にも及して動かざるいとも貴き大詔詞ありけり然るは名は體を顯すとも名は實の實とも云ひて其物の體用を呼び顯すものにて或は體の自ら名告る如き理ありと云ひても可なるもの也然れば名義を明にすれば從ひて體用をも明に知らるゝもの也古へ業を名といひて世々相傳の業を世々の名といひ祖より繼ぎ傳へたるを祖の名といひ氏々の業を氏々名々と云ふ此れ其業を稱するが則名さればなり假令は中臣は君と臣との中に在りて上下を相合ふる職にて中ツオミ

の約れる言齋部は神に仕へてイミキヨマン職あるも皆名に其業は具れ又主殿は殿を守る職主水は水を取る職あるが如し(主殿今はトノモといひモヒトリは今はモンドと轉じ云水は飲水を盛る器なり)又大中臣清麻呂は數朝に歴事し國の耆老として朝儀國典を暗練せる人ありければ詔曰 中臣清麻呂其心如名清慎勤恪久奉神祇朕有喜焉特授三從二位とありまた和氣清麻呂は國家の穢を清められたりこの二人の清麻呂の如きは詔詞に如名云とある如く則名實相適ひたる人あり火の體用はヒと云ふ名に具り水の體用はミツと云ふ名に具れるごとく天地間萬物悉く然なる所以を推て思へば神明の御名も其主宰爲給ふ所の神徳の御名となれる由は知るゝなり神世に須佐之男命の大國主神に任玉ひし御言に意禮爲大國主神亦爲宇都志國玉神而云云とあるは其爲給ふへき御業を命せ玉ひしものにてこゝにては未だ神名に附き玉ひしにはあらず大國主神とされども宇都志國玉神となりてとあるも共に須佐之男命の御任の御詞の隨あるを其御任の如く爲し玉ひしに依りて終に御名にはなりし也假令は天皇

の御任に汝殿を守れとある御詞のまゝに殿を守るを直ちに殿守と云ふ職名に成れるが如し此れ孰れの神も其御名に其主宰爲玉ふ御業の具れる明徴なりかれば天照大神の御名も此に同じく天に坐しまして地球上を照します大神と云ふこと聞わたるがごとし然るは仁明紀に天照國の日宮能聖之御子曾とある天照國とは天にして照輝く國といふこと日宮とは其國なる宮を云ふこと（日は稱言にて副たるのみ）聖は日を知し召す由にて則大神を申し奉り御子は皇孫命を申す言あり又神功紀に大御神の皇后に託りまして宣ひし御言に撞賢木殿之御魂天疎向津媛命とあるは大御神の御自身名告玉ひし御實名とも申すべきものなり）一説に此は大御神の御名にはあらず他神ありと云説あれども此段の前後の文を孰く思へば大御神の御事なること疑なし撞賢木は殿といはむ序なるのみ（本居翁の説には撞賢木は天岩戸の前の故事にて天香久山の賢木に御鏡を懸けたるに依るといはれたれどもさては御鏡に託たる御魂になれるを天疎云云とある御名に依れば御鏡云云の義にはあらず）斯て向津媛とは天に疎坐て此國土に向

ひ坐す由にて御名にて天照とあるに同じ意となる也此二の故事を以て御名の義は明かり斯て日疎を主宰坐すことは神武紀に吾者爲日神之御子而向日疎不良と見え又若日下部王命奏天皇給御言に背日幸之事甚恐云云と見たるは向といひ背といひ言は表裏されども日を貴び敬ひたる意なるは則大御神の主宰坐す國なれば也（日も一箇の大國なること勿論也）此等を合せて大御神の御名の意を知るべし斯て其御名を言に掛けて申奉るは即て神徳を稱へ奉る意になることは初めにいへる名と云言義に合せて辨ふへし古き祝詞に某命御名申とあるも御名の如く其主宰坐す神徳を以て守榮らしめ給へといふ意のことあり抑物に對して其名を呼ぶに言靈の妙によりて死物も活物となり遠きも近く疎きも親くなる理となりて奇異を顯すもの也天孫本紀に十種の神寶を數へつゝ其名を呼ぶに死たる者も生かへるといふ古傳さへあるをや斯くて嬰兒の漸く言を爲し初る時は必有麻々々といふ一言に限るものにて有麻は美にて物を稱する言也貴人美酒美織錦美少女等の如し物の味をツマと云ふ其味を美稱

したるにて味の本言にはあらず（乳をツマと云も猶其味を美稱したる言には今世乳母と云もツマの轉したる也又源氏物語逢生卷に故乳母の宜ひおきしこともあり云々と見え又東鑑に武衛乳付ノ青女ヲ召レ摩々ト號ス」とあり今繼母をマ、ハ、と云も乳母よりいでたる言あるべし）此は人命を助る食を美稱して美と云初るものなるべし猶一層云は、小兒は未内部の整はざるものなれば食物を美々と美稱して云はしめ其食物を以て能く胃を和し身体を養はしめむとの神の御心あるべし此物を美稱して呼べば死物も活物にある所以也（此等のことは己が著したる言靈妙用論にいへり）然れば己に云へる如く神名は本其主宰の神徳の御名とされるものなれば御名を申し奉れば則其神徳を美稱する意にありて即て言靈の妙に依りて神異を顯し給ふ理あること往々いへる所に合せて辨ふべし是以畏かれと天照大御神と御名を申奉れば遠く天上に坐す本つ御靈も深く御舎に坐す分靈も現に顯れまして榮る玉ふ理あることは動くべくもあらく疑ふべくもあらず假令は籠中に飼鳥鳴きて野外の同鳥の近づき來るに比しきもの也

けり

政教一致

政教は一致といひ又不一致といふ兩説ありといへども概する時は教法家は一致の説を主張し其他は大方不一致を主張せり一致といひ不一致を云ふ輩も皆教に二種あるを知る所より異論を生ずるもの也二種とは姑く目して公教私教と分つへし公教は法憲を翼賛して之を諭し私教は一家一宗區々の教を立て之に依らしめむとするを云也政教不一致と云ものは此私教を見て概して教とたもひなすより起り一家の説も猶私教を主とし推して政教一致と爲るもの也然れども私教は素來政治と相離れたるものにして一致なるべきものあらず憲法の源は神代より出て歴世の天皇之を傳へ給ひて皇統と共に萬世不易なるもの也神道にも幽冥を説き靈魂の妙用を諭すを主とするは道の主要にして最重大あることあれども猶私教に屬するものとす何にとあらば神世に顯幽分界の時皇孫

は顯事を知らしめす事と定れる上は天皇のしるしめす天下の政は素來顯事なれば朝
 憲を諭す所の公教は幽事に係らず全く顯事なれば也然れども神祇を崇敬する教は公教
 に屬す何にとあらば世々の憲に專之を示されたれば也(委しきことは別に云べし)
 斯て教は憲の解の如きものなる由は(此教は公教を云)崇神天皇御紀曰導民之本
 在二教化一也云々と其選二郡卿一遣于四方一令知朕意云々と若有不_レ受_レ教者_二乃舉_レ兵伐
 之_一とあり此詔詞に導民之本在二於教化一と係りたるが其語脈は中間の語を隔て、専ら
 令_レ知_二朕意_一と係りたる前後照應したる語を熟々思ふ時は憲を示すが、則教なること
 明也斯て又こゝに朕憲とあるは當代新に設けられたる憲にはあらず朕憲とは朕が知
 れる憲と詔ふ意にて天祖の定め給へるまゝに神隨御自身知しめす憲を詔へるもの也然
 るは乃里と云ふ言義の本を推ても憲は不易に永續するものを云言なる由は知られたり
 (乃里と云言の本義は四十二號に委しく述べたり)天祖の定め給へる憲とは何あるを云
 をならば天祖の勅_二皇孫_一曰千五百秋之瑞穗國是吾子孫可_レ王之_レ地也宜_二爾皇孫就

而治行矣實祚之隆當_二與_二天壤無窮_一矣とあるこれあり此れ先つ萬古不易に君臣
 の分を定め給ひしもの也崇神天皇の詔に令_レ知_二朕意_一とあるも四方の國々の民の王
 化に服さるるを諭さしめ玉ふとて四方に群卿を遣れしにて其王化に服すべきは天祖
 の定王ひし君臣の分を能く知らしむるにあれば此憲と指すは天祖神勅を受継ぎ給ひ
 し憲なること明也皇極天皇の御代に入鹿を誅せられたる時漢直等の其眷屬を集
 へ甲を懷き兵を持ち軍陣を設けて入鹿を助けむとする時將軍巨勢德陀巨を遣れて天
 地の初より君臣の分あることを説かしめられたることあり(事は孝徳紀に見えたり)
 此時將軍に命し給ひしも若し教を受けざる時は兵力を以て征し給むとの御意あること
 専ら崇神天皇の勅旨に同じかることなり次に天照大神手持_二寶鏡_一授_二天忍穗耳尊_一而
 祝之曰吾兒視_二此寶鏡_一當_レ猶_レ視_二吾可_二與_二同_二牀_一共_レ殿_一以_レ爲_二齋_一鏡とあるは父子
 の道を定め給ひしにて此に君臣父子の道初れり(五倫は君臣父子を以て經とし夫婦兄
 弟朋友は之に従ひて緯とあること既にいへり)然るに上文にいへる如く顯政は人道を

治め給ふものにて人道は君臣父子の道より初れば先づ此の道を定め給へるもの也上古の朝憲を重し専ら教へ玉ひしことは枚擧するに遑あらず維新以來も猶古に法給ひて明治二年五月二十一日令に我皇國天神天祖極ヲ立基ヲ開キ給ヒシヨリ列聖相承天工ニ代リ天職ヲ治メ祭政維一上下同心治教上ニ明ニシテ風俗下ニ美ク皇道照ニ萬國ニ卓越ス云々とある治教上ニ明ニシテとあるは政教を一に爲給へることの明文ならずや又同三年八月の令に君臣の義父子の親は倫理の最ナル者我國祖宗以來特ニ之ヲ重シ之ヲ嚴ニス云々とあるは君臣父子の道を政の上に教へ玉ひしもの也又五條誓文第二條に上下心ヲ一ニシテ盛ニ經綸ヲ行フベシとあるは天祖の定め云へる經綸を千萬載の後まで保けて教へ給ひしもの也(追々政に沿革ありといへども此五條は神明に盟ひ給ひしものなれば世のあらん限改易へ給はぬ旋なり若之を動し給ふ時は神明を欺き玉ひ民に不信を示し給ふものとあれば也)斯て法律は其源人の爲すべきことを爲する罪と爲すまじきことを爲る罪を刑するものにて人の惡を懲らし善に遷らす法なれ

は其中に教の具ることを一二の例を云はゞ罪を犯して自首する時は犯姦殺傷毀棄(陪償の適はぬ毀棄を云)の外は都て其罪を免さるゝは過を開悟して惡を改め善に遷りたる心を取らるゝにて猶人を善に導き給ふものと云はざるを得す又干名犯義の律に卑幼は尊長を敬ふべきものとし尊長は卑幼を愛すべきものとする名分を干し義を犯して子及孫妻等の祖父母父母等の罪を上告し又祖父母父母等の子及孫等の罪を上告するものを刑する律にて人たる者必義を守るべきことを教へ玉ひしもの也或は容隱の律あり此律は同居親屬また別居三等の親屬の罪を犯せるを容隱するをも論せられぬは猶尊卑長幼の義を重すへき情を量られ或は不孝を刑せられ或は祖父母父母夫等の人に殺れたるを私和するを罪せられ或は懲役人の父母の老疾等にて侍養するものなき時は纒に二日三日等の捧鎖を以て放免せられて父母に仕ふる道を闕しめ玉はざるも法律の中に人道を守らしめらるゝ法を設けられて兼て律例を人民に知らしめらるゝ(律を頒行せられ書肆に命せられて贖賣せられ舊教部省の達にも教道職に律を俗諭すべしとある

なり) 悪を改め善に遷らしめ給ふ主旨なることは 則改憲と教化と一致なる所以なり 畢竟は一家一宗に立る所の私教をのみ教法と見るより 政教不一致の説は起るもの也私 教は素來政治に離れたるものなれば其依る所も人民の信仰自由に任せらるゝものにて 政府に關せざるもの也公教は之に反するをよく辨ふへし

神道名實論

設神理 以獎俗 敷英風 以弘國

此は古事記の序に天武天皇の御代を指したる文なり此文を以て神道といふ名と實とを 説むとす先づ神理とは造化の神の妙用の萬物の上に具り萬の物に妙用あるをいふ火の 燃上り水の流れて下るも神理に外ならず又設るとは其理の時として隠れたるか如く 事業の上に行れさりしを取出し顯してと云意也(常に無きものを更に依り成すを設る と云ふとは別あり) 以獎俗とは其神理を則としてといふ意獎むは道に獎の趣くをい

ふ英風は美風と云はむか如し其美しき風俗を天下に敷及して國を弘め玉ふよし也此神 理に従て履み行く所が 則人の道なりこの人の道を神の道とも云ふは仮令は孔子孟子 等の専ら弘めたる道を孔孟の道と云ひ釋迦の弘めたる道を釋迦の道といふ如く神の始 め玉ひしをもて唯神の道といひ分ちたるのみ(孔子釋迦の道も素より神の道の枝道な ることは先哲も云はれたるか如く孔子釋迦等は其枝道の彼の國どもに纔に傳りたるを 或は補ひ或は改めなどして弘めたるもの也) 然れば神の道人の道と別なるものにはあ らず荷田東塵の歌に「世の中に神の道とて道あらば人の外なる人や學ばむ」とよまれ たるは實に然ることにて人の道の外に神の道といふものあるにはあらずもし神の道と いふもの外にあらば其道は人の學ひ行ふべき道にはあらずといふ意なり此道我國の内 に限りたる一國の道ならむには天地間の公道といふべからず全く我國の私道にして大 道にはあらず然るを天地を成し玉ひし天神の其本を始め玉ひ天照大御神の傳へ玉ひし 道あるを以て地球上此に依らるればあるへからの大道なるがかし此道を隨神道とも云

ふは外國の人の作りて始めたる道に對して云ふものあり往に云へる如く外國にもたのづから傳りし道はありしかども人の小さき智を以て思ひ僻めてさかしらに作り改めたるより遂に人の作りたる道とはあるなり然るは外國も土地は皆造化神の成し玉ひて國の始めを修理固成せしは都て天神の依しを受し神人の所業によれるもの也然れば外國と雖も初は皆神國にして神の坐しましたる國也然るを彼は早く人の世となりて其神孫を傳へす此は晚く人の世とありて久しく神の世にて其神の御子孫の古今一日の如く坐ますを以て獨神國の名實は我國にのみ止りしもの也（如此云は、外國人は一歩り諾ぬこともあるべし時運至りて地球上此理を知るべき時必あるべし）故に外國には神理のまゝに具りし道は失せて人の作り初めたる道の弘まれるを我國は神の初玉ひし道の其まゝ傳り來しものなり斯て天地を成し玉ひし神の其本を始め玉ひ天照大御神の傳へ玉ひし道とは何なるを云ふとあらは造化の神徳の奇異ある妙用を以て天地を修理固成爲し玉ひて天地間萬物に委く神理を具へしめ玉ひて猶夫れを本とし則として大

八島を修理固成なし玉はむことを伊邪那岐伊邪那美二柱の神に依し玉ひて御皇統三段の御依の初を定め玉ひしか大道の因りて起る本となる（三段の御依のことは別に云ふへし）然して其子天照大御神の皇孫に天下を授け玉ひし時の勅に葦原千五百秋之瑞穂國是吾子孫可王地也宜爾皇孫就而治焉行矣寶祚之隆當與天壤無窮者矣とあるは君臣の道を定め玉ひし本なり猶神勅ありそは天照大御神手持寶鏡授天忍穗耳尊而祝之曰吾兒視此寶鏡當猶視吾可與同狀共殿以爲齋鏡とあるは父子の道を定め玉ひし本となりて則君臣父子の道の定まりなり（天皇の天職も彼の修理固成の神勅に依らせ玉ひ萬民の職をも皆天皇の天職に倣ひ奉りて修理固成の神教に従ひ奉るもの也）此先神の道と云は則人の道なる所以あり然して君臣父子夫婦兄弟朋友の五倫の中に經緯の二ありて君臣父子は上下に位して則經あり夫婦兄弟朋友は横に相並て則ち緯あり經定る時は夫を本として緯は從ひて定る（布絹の經を定るときは經を力として緯は調ふが如し）然れば君臣父子の道を定めべく詭て玉ひし

ものなることを篤く思ふへし（猶云は、君臣の道は神勅の如く天地と共に定り父子の道も子々繼て其血統の限り易ることあければ猶經也）（經の始より終まで一筋）此他敬神の道といふものあることなし然るを君臣父子等の道を説くを敬神の道を説くにあらず神道の講説にあらずと云は思はざるの甚しきものといふへし何にとならば神の初め玉ひ萬世人の道を定め玉ひしことを説くか何と神の道にあらずといはんや此を選きて何あるを説くか神の道を説くものと云はむまた神の傳へ玉ひし君臣父子の道を守るはやかて神教に従ふものにて其を守るか敬神なるものをや仮分は親たるもの其子孫の爲に立たる掟を其子篤く守りて親の意に違はじとするを誰か孝道にあらずといはむ唯朝暮親に見ゆるのみが孝といふものは然れば神の掟玉ひし君臣父子の道を守れと説くか何にして敬神を説くにあらずとせむがいとも惑へるの甚しきものなり神の道は唯人たる者の務むる今日人々の上にある道にて他に求むべき道ならず秘傳も口授もあらずるを近昔に至りて俗神道といふものいできて佛道の傳承相承といふことに擬して神道

相傳などいふことはじまり性しき修法めがしき業と其他種々のかゝしきことありけるを大政復古の初朝廷より嚴しき改正ありけるか表向こそ改りたれ私には猶清くも改まらず失ひかねたる街賣神道の風習遺りて神道は今日に一流の枝道の如く巫覡の輩加持祈禱する業の如く見られて世に容れざるも皆これらの弊に起るものあるぞかし又恒例臨時の祭事は國家の禮典にして最闕くべからざる事ながら祭典が神道と云ふものにもあらず又人力の及はざるを神に請ひ神恩の忝さに拜禮をなす等は人の必ずなすべき業なるのみ此を以て神道と稱すべきものならず然るに信神を勤むる神道者流の説教に頻りに神社に詣さするを主とし神拜を勧めなとするも敬神の端にて必あしき事にはあらずされども眞の道を説くこと甚拙く或は神前に於て浮屠の經文を讀むに倣ひて古にも例なき唱言あさするを敬神を勤むるものとあすはいともくも愚にして未開無智の事ならずや是を以て要路に在りて人民を預れる人あざは神道者流の説教は人民の害に成るまでにはあらずとも素より爲になるものにはあらずと度外視し又開明

家には神道の説教は開化を妨げ人民を愚にするものなりといふ説のあるは皆今の教
 導者の自身招くなり然いなるの腹立しさに開明ある人を敵視して夫に抗せむとする
 氣あれは益不開化に至り街賣流の姿にいたるはいともくも歎しきことなり道の爲
 日夜切齒扼腕せらるゝなり今我此説教を聞く者さる類を神道と思ふこと勿れ信神者の
 信神を取違へたるは信神者の誤にあらす必竟説聞するもの誤あり仮令は密賣女は賣
 る者に罪ありて之を擬律して刑すといへとも買者は律に於て論せざるが如し猶いはま
 ほしきことたはかれとさのみはとてさて止め重て委く説くへくなん

慎 獨

動くころ人の眞心といふことく見るもの聞くものによりて速に動くものは心なり花の
 下蔭に立ちては世に花ばかりめでたきものはあらずと他心もあきを月さしいで、四
 方の詠もかはるにつれ心もうつろひて月計りあはれなるものはあらずと花に染めし晝

の心は忘れたるが如く角力を見れば心も勇ましく俳優を見ればをかしく三線の糸の音
 を聞きて心うごかれ倭琴を聞きてしめやかあるこゝちするも皆見るもの聞くものに變
 る心あるりかしこの心の動く繞る所より善にもうつり悪にも入り初る本とある譬は
 其初は衢のこごとく善悪兩道の道分にてこゝにて善悪ともいと淺かれども一足二足と漸
 く深く踏み入りては善悪の兩道は左右に遠く離れて立戻り難きものとあるべしこを水
 火の二つにたとへは其本は幽谷より流れ初る水も小川に入り小溝に觸れて田水となる
 もあり小川より大河に入り終に海に注ぐもあるべし又其本は石と金との間より燧出
 たる火も附木に觸れ薪木にうつりて飯炊く火とあるもあり誤りて物に觸れ戸障子にう
 つり遂に大災となるもあるべし然れば其本靈魂の妙用より出たる心は一つなれと觸る
 べしものに從ひて善にも悪にも種々にうつるものなりけり終日俳優を見たるかへり路に
 は妓樓に登りて杯を取らむと思ふ情もおこるべし一日善言を聞きてかへり路に父母の
 好む物を求めかへらむと思ふ心ともなるべし昔鱗掛松とよびし大盜賊ありりのはじめ

常の如く鑄掛の器械を肩にして夏の日東京なる兩國橋を通ることあり端によりて立留りつゝ川中を望みればすみだ川の流に棹さゝせゆく屋形船のすだれまきあけたる中にいとあである二人斗り居て一人は斛を取り一人は三絃を取れり男一人此二人の妓女らしきを左右にをきて川風に夏を忘るゝさまあり此を見て思へるやう世はさまゝなるものにもあるかな吾が如くこの暑に器械をかつきて終日汗を流して鍋の尻釜の破を鑄懸歩行きても何計りの價かあらむ同じ世に橋上にはかく憂思するものあり橋下にはさばかり樂するものありあやまきものはうき世なりけり我今三度の飯を止めて業を勵むとも生涯あの如き樂を爲すことあるへくもたばへすいざや今よりこの業を止めて彼如く樂むものゝ家に押入り金銀を奪ひとりて思ふが如く樂むへし今は此器械何にかはせむと橋より川の中へ抛打ちて遂に大盜賊となりぬといふ又或洋人學問にとて他國に往きて或學者の家に寄留せり晝夜怠らず學びたれども思ふように學の進ねば心辭々としつつ思ひけるはかくては年を重ねて學びたりとも業遂る事はおほつかなし寧國

に歸らむやと思ひて或時庭の方を詠めやれば其家の軒にいと大なる蜜蜂の巢かけたり見てをるほどに蜂は頻りに巢を出入して翳々しき状ありこゝに圖らす我と悟ることありて思ふやう今かく蜂のいと閑しけに出入するは世の中万静けき心もあくいとも翳々しきに似たり然れど蜂は何計りの日數をや經にけむいと緩なる花の露など昨持來てかくまて殿ある巢を作れりかくて其巢はよく調ひて列らね合せたる所に乱るゝことあく粗あることあく蜜に作りあしたるは此いとうるさく閑しく静ならぬ世にありて時間を遣へす日課を怠らず粗ならず惰ならず勤るに似たり蜂は如此勵精してこゝろ其巢の中にいと甘き蜜を醸すなれ人も如此爲ば食録は其中にあらむと思ひ極めて夫より晝夜を遣す勉強して遂に各國に知れたる大學者にありぬとなん（事は西洋立志篇に載る所文は引直せり）彼鑄掛松の如きも見るものに據りて憤發するところありこの洋人も見るものに依りて志を起したるなり其見る物によりて憤發するは同じくてうの事は天地の違ありかゝれば見るもの聞くものによりて心の動く際が則善惡の分るゝ所に

ていともくおそろしきものは心ありけり草木の類同じ種を分けて異地に植ればその
風土に従ひて變らざるを得ず江南の橋を江北に移せば化して枳と成るといふを則ち此
なる驚は花に馴れ香に染りておのづから其音美しく鳥は穢物を咋み汚穢に觸れておの
づから其聲おしく驚のねをさく人もたのづからこゝちよく鳥のこゑをさく人の心もた
のづからこゝろよからず覺ゆるが如し然れば假にもあしきものによれずあしきことを
見聞せずよき事にふれよきことを見聞して動く心のますく善に進むことを思ふが獨
を慎むといふものなるるかし

さく花にふれしたもともうつしかと

月にそぬるゝものとなりけり

交際

天下の事交際より緊要なるものはあらず一人と一人と相交るに始りて一郷一郡一國に

及び万里の波濤を隔たる外國とも交りて害を去り利を得るものとあるは獨り交際に止
る天地の氣相交りて万物成り男女相接て子を産むに異らず然るに此相交る者同氣同好
の比類のみにあらず反對して和し難き者と雖も相合せて久く離さざるべきは何時しか
二物相交りて互に其害は制せられて利を遺すことなきこと能はず天上より蒸降する氣
は名稱して生氣と云ふべし泉より昇降する氣は名稱して殺氣と云ふべし此生氣の二氣合
抱和調して生々化々の妙用とあるは交際の尤實功の表るゝ大なるものなり此を古典
に稽ふるに伊邪那美命は泉に退坐て其氣に動れ玉ひて千頭殺むと詔ひしは殺氣
の理に因り伊邪那使命の一日に千五百産屋立てむと詔ひしは生氣の理に因り玉ひ其生
殺の二氣に因り玉へる二柱の御間に日月の大神成り玉ひ又天照大御神は天上を知り坐
して生氣を掌り玉ふ理あり素佐之男命は初め泉の氣の残れる理に因りて生れ玉ひ遂に
泉に止り坐して殺氣を掌り玉へる理おはします此二柱の神の御間に五男三女の神成坐
すなど其他古傳説に確證明あり(此説は別に委く説くべし)此生殺二氣の元素は反對

なるものあれども和調しては其功用の大なること水火の反對なるが相交て物を制し劇なる物と穩なる物と相交て病を治るが如し世の學者に區々の流義ありと雖も概る時は改革家と古風家の二種に過ぐへからず改革家は穎敏すして進て取る者なり古風家は實着にして退て守る者なり然れども退て守る者は頑陋に陥る弊あり進て取る者は輕卒に流るゝ患あり(田舎人は正直あれども頑愚に都會人は伶俐なれど輕薄あるが如し)其穎敏あると實着なるとは取るべきものなれども頑陋あると輕卒なるとは取るへからぬもの也然れども此二家相和する互の力に因りて其弊害を制し退かしむるに至らば純良ある所の遺るものとあるべし譬は二人の質一人は温和にして遅きものと一人は活潑にして早きものと相交らは二人の質相和して早からず遅らす高尚ある人物を成し出すが如し然るを我質に似ざる者を忌み嫌ふは其心の偏小なるに依るものあり維新の頃の世態を以て云はゞ攘夷家と云ものと開國家と云ものとありて互に敵視する者あれども其素心を尋ねれば共に愛國の情より起らざるはなし然れば國の爲に篤き志を相合せ

たらむには敵視する處の氷炭の異論は薄くありて愛國心を佑くるものとならむ今の有志者は此二家の人の相集りたるものなるにて知るへし備前の國に富める民の兄弟あり家費の事より起りて甚く争ふことあり其里内の民兄に黨する者と弟に黨する者出來て遂に各百人に餘れり其争を訴へ出るに列吏の説諭を用ひず判吏も困し果て年長く判決することあくて過ぎぬ然るに熊澤助八代りて判決となる熊澤思ふ由ありて兄弟を己が家に召して兄弟二人を一間に置き嚴冬の頃あれば火爐を二人の中にするて終日問ふことなし日暮に及びて盤餐を出し二人を相並ばしめて食はしむ夜は二人枕を並べ寢具を設けぬ斯くてあること三日其間熊澤が幼き子の兄弟二人をして障子を隔て、甚陸しく遊ばしむ然るに初のはとは二人一言の詞を交ることもあかりしが狭き一間に差向ひ一爐に寄り寢食をも共にせしかば自ら一言二言發したる折から幼き兄弟二人の遊ぶを障子越に伺へは親きこと素より血肉を分けたる兄弟さもあるへしと覺ゆる心地出來にけるが此二人も家に幼き兄弟の子もあれば熊澤の家の兄弟の子より己れか家の

兄弟の子を思ひ其子より己か兄弟の上に思ひ轉して遂に今はなき父母をさへ思へ浮ひて其情篤に復し宿怨は自ら消るか如く思ひなりて自ら其訴を却下せられむことを請ひ求めぬる由なり（鶴梁文集卷四に載る處の意を取る）此等は一人と一人と相交る上を云ふことあるに此を推廣めて云はゞ管に二人の交際止るへがらす野蠻の國の能く半開國に交らば野蠻なる所は失せて終る半開の國に至り半開の國開化の國に交らば半開なる處は失せて開化の國に至るべし諺に麻に雜る蓬とは此あり然れば交際より起りて事物調ひ人智開くるに至るべし故に忽にすまじきものは交際なりけり

産物製物論

書紀曰大己貴命謂少彦名命曰吾等所造之國豈謂美成乎少彦名命對曰或有所成或有所不成是談乎蓋有幽深之致焉此本文に據りて産物製物の説を述へむ然るは二柱神御問答の次第は聞るたるが如し撰者の

注に蓋有幽深之致とあるは一涉の義にはあるべからず試に云はゞ此所成とあるは二柱神の開拓ありし國土に産物の成れるを詔しあるへし所不成とは遂に後の世に製造の成らむことをかけて詔しものあるべし美質にして堅實なる産物は百千足水穗國に天地の神の御心として成出精密にして奇巧ある製物は海外の國自然其技に長するものなり（外國は國土粗惡にして物産疎薄なれば製造を以て之を補くること現前見て知るべし然れども猶此も神の御心なる所以あるへし）斯て此二柱神の御上を姑く産物製物に準へて云はゞ大己貴命は皇國に生玉ひて産物の方に因坐す所以ましく少彦名命は海外に天降りまして後に皇國に渡り來まして製物の方に因坐す所以ましますといふべし然れば皇國に産出する物の甚勝れたるを海外製造術を以て彌純美なるものとなすことは少彦名命海外より參來坐て大己貴命に御力を協せ玉ひたるに比しきものあり然れば物産製造共に其本は神の御心よりいづるものにて素來一も欠くべからざるは勿論なり然るを物産は皇國のものあるを以て貴み製造の業方今多く西洋の奇巧に效

ふこと多かるを以て賤むものあるは上件述る處の本義を究め辨へざる所以あるぞかし
 又製造術に西洋の奇巧あるを見て驚き更に物産の本を知らざるも共に漏れりと云はざ
 るを得ず製造物産の二にては世人大方製造の密にして巧あるを貴ふ者多し假令は物産
 は根本のごとく製造は花葉の如し花葉は美しく目覺しきものなればよく人の目に着け
 とも根本は見立もなく目に着くことなきものなり然れども根本ありてこそ美しき花も
 匂はしき葉も榮ゆるものなれば産物の良きによりて彌製造の巧も顯るゝものあり柵機
 姫に肖たる裁縫人もよき絹ありてその投も顯れ龍田姫に劣らぬ手人もよき染草ありて
 その色も榮ゆへきものなり上野國富岡の如き製絲場を設るとも大食津比賣命の御身よ
 り生たる蠶のなかりせば彼製絲場も空しく須を保利は參りたりとも水穂國の米なかり
 せば美酒を醸すことも適はし佛國博覽會の時以太利亞人は我出品人に忠告するに何故
 に日本人は自國の名産を棄て他の出品を貴重せらるゝや外國人も甚だ貴重する日本の
 産物を其國人の貴重せぬはいかいたることなり云云といへりし由(佛國博覽會畧報)

然れば製造の妙も物産の良きが本あることはいふも更なり又良き物産はありとも製造
 の業に巧ならざれば物産も詮なきものあるへし尾張國瀬戸の陶器師東四郎と聞へたる
 ものあり天の下にゆるされたる技人あることは人の知るところなり此東四郎國々を遊
 歴して所々の土を取りて焼き試みつるに一所としてわが技にかなひたる土を得ず漸
 尾張國瀬戸の里に来て初めて意に適ひたる土を得て天下の名器を作り出したりといふ
 かゝる土ありとも東四郎に遇さるれば其土は常の泥土なるべく東四郎の技ありとも瀬
 戸の土なかりせば東四郎は常の陶器師なるべし此れ物産と製造と両ながら全からざれ
 ばあるべからず世の學者の上を見るにも猶如此ものにて皇學者流は唯古に依りて
 今の古に勝れる事多かるも取らず方今流行の學者は唯新に走るを主として古の美しき
 事あるにも意を注ずして聊も古を本とする意なし共に偏れるものと云はざるを得ず
 只古にのみ據る者は一步も古人の上に進みいつること能はず新に走るものは本を知
 らずして改革を主とするものなり梢は雲居を貫き幹は吹風に靡ぬ大樹に(此大樹國体

也) 歐米の花を匂はせてこそ地球上に並ぶ國もなき御國となるへきものなれ流行學者に云はせば今の時勢には今の政治あるへし焉を古を本とせむ若古を本とせむとする時は不開化に却步する初となるまご云ふべし然れども今や政府に於て古を本と爲給ふことは近く徵兵の詔書に本邦古昔の制に基き海外各國の式を酌酌し云々又改定律の上諭書に國家の政憲に原き各國の定律を酌み云々とあるにあらずや海外の式を酌酌爲給ふにも古昔の制に基き各國の定律を酌給ふにも國家の政憲に原せ玉へり政府の意のある處如此(我輩素より萬民をして朝旨を遵守せしむる職として此意を述へざるを得ず)神の初め玉ひし産物をのみ貴み方今の製造の枝の便にして巧なるを賞す又或は製造の奇あるに目を奪れて物産の本を思はざる二もから偏れるは學者の一方に偏れるが如し彼少彦名命の後世を係けて詔ひ韓招神の御業又大物主神の海外の國を寄せ給ひし神世の故事など思ひ合せる時は今の如く歐洲諸國より製造の術を傳へて皇國の御國産を益美好き物とすることに成けるは皆神の御心あらざるはあし明治の六年皇

后宮上野國富山の製絲場に行啓まししとき御歌に「いとくるまどくもめぐりて大御代の富をたすく道ひらけつ」と詠せ玉ひしもかゝる時運の來て此製絲のわざのひらくるごとく萬のわざのひらけたる御代を賀き玉ふ御心を裏に含め玉ひしをつら考ふべしまことや今の世を遙に遠き神世に少彦名神の掛けて詔ひけむ貴きをも此御歌にも合せてたもいまつるべし

感泣

天地を動かし、目に見えぬ鬼神をもあはれとおもはせ、男女の中をもやはらげ、たけきものゝふの心をも、あぐさむるは歌也(古今和歌集の序)歌といふものは喜怒哀樂の情の聲に顯はるゝを詞に連らねたるを云、人は言語あれば其情を言に連ぬと雖も禽獸は言語を爲すこと能されば之を聲に顯す、鶯の春陽に觸れ蛙の秋氣に感じて聲を發するも、人の歌に異なることあし、然れば鶯の聲を聞けば聞く人も亦春の心を催し

蛙の聲を聞けば聞く人も亦秋の寂きを覺ゆるは、其動物の感情の轉じて再び聞く人に感と興さしむるもの也、情中に動きて聲に顯はるゝは萬物の常なり、其極に至てや、鬼神を感せしめ、人を泣かしむるもの也、抑も喜怒哀樂の切に至りて情極る時は必ず泣かざること能はず、然れば泣くばかり、情の切なるものはあらず、其情の泣に至りて、聞く人之に應じて心動かざるはあらず、泣く計り民を服さしむるは仁君の爲す處、泣く計り民を苦ましむるは、暴君の爲す處、其仁に感じて泣くも、其暴に苦んで泣くも、共に喜と哀との切あるに依るもの也、泣けて金を取るは舊諸侯の用金、泣きて金を取るは手のある藝娼妓か、又泣けて大業を起させたるは、文覺上人なるべし、頼朝伊豆國蛭が小島に在し時文覺獨體一頭を携へ來て父義朝の獨體ありと頼朝を欺きて旗を石橋山に揚させたり、こゝに誠意の極意に至るを以て人を感銘せしめたる物語を、引出て神明の感格する所も亦此に異なることなきを知らしむべし、然るは黒田長政の二子萬徳丸五歳にありける時賀庭を聞きて家老を始め、者頭物奉行以下諸士悉く廣間

に呼び出して酒肴を與ふ、其頃の武士に下戸は稀にて英勇の間ある者は殊に鯨飲の聞にも高く、又此の宴美酒嘉肴を盡したれば、各大杯を傾けつゝ、其宴甚盛なる時長政萬徳丸の手を引きて座に出でて諸臣に見るしむ、此時老臣森但馬萬徳丸を熟々見て大聲を發して曰く、若君某が一言を能く聞き給ひて必ず父君に似給ふと云ひつゝ、泣くを見て長政大に怒り但馬に向ひて曰く、汝が言ふ所甚だ以て無禮也、吾數度の戰場に一度も後れを取りたることなし、向ふ所破らざるはあく、攻め所抜かざるはあし、萬徳丸に對して我如く弓矢を取れとこそ云べけれ何とて我に似るかと云ふぞと詰り問ふ但馬答へて曰く然ればなり、君の癖として味方敗色を顯す時は、何時も君討死せむとて馬を進め給ふ、此れ大將の器量にあらず、命を全うして後の勝を思はむこそ、大將の心と云ふものなれ故に若君は君の匹夫の勇に似給ふと申すことなりと、恐るゝ氣色もあく云ひ放つ、此時第一の座にありし栗山大膳泣き出して曰く、嬉哉黒田家の長久を見ること今日にあり、森が君に對して不敬を願みず若君を思ひ奉る情、言語

百
の上に顯れたり、森が深情は却て此不敬の語を以て證するに足る、君はかゝる忠臣を
持給へば、今大國の主と成り給ひ天下の武士に名將と仰がれ給ふ事なりとて、落涙數
行に及ぶ長政この栗山が言を聞きて色を和けて、落涙せりとなく、この酒宴の席にて
圖らずも、主従三人の情切に至りて感泣せしは、其情の極る所に相應したるものあり、
又近く武田耕雲齋贈大納言齋昭卿の意志を繼ぎて、筑波山に兵を起したるが事成らざ
れば、圍みを切破りて仲仙道より上京して、源烈公の子、一橋中納言に頼りて奏聞せ
んとて、同志の人々と共に信濃國まで上りけるに、幕府より同國の諸侯に令を下して
之を防かしむ、この命によりて上田松代諏訪松本飯田等の諸藩、皆兵を和田峠に出し
て防禦す、此時武田耕雲齋使を和田峠の諸藩に遣して、曰く某等上京するは、舉動を
爲すの意にあらず、主家の親族の在京するに就て、上聞に達する次第ありて上るにな
む、其情を洞察ありて道を開きて通し給へと云送りけるに、幕府の嚴命なれば諸藩之
を聽かず、遂に兵端を開くに至りしが死を極めたる武田方の兵強くして、諸藩惣敗軍

となりて峠より下へ引揚げたり、此時諏訪藩の足輕田代軍造といふもの武田家に捕れ
たり、然るに軍造の一子新吉といふもの年十五にて陣中に在りしが、母は盲目となり
七歳に在る妹あるのみなれば、父あき時は二人を餓死せしむるに至れば、某父に換り
たき由其藩の隊長に請ひ許を受けて着用せし番具足を脱ぎ大小の刀をも脱し無刀にな
りて唯一人峠の頂上に登り武田の陣頭に至る、番兵之を見て何者ありやと咎むるに新
吉答へて曰く某は今朝の戦に捕虜となりし諏訪家の足輕田代軍造と申す者の一子
新吉と申す者にてはべる、某が母は久しき眼病にて七八年前より盲目となれり、妹
は纔に七歳にて父なき時は兩人の露命を繋ぐべきやうあければ某を父に換給ひて如
何なる御處置にも行ひ給へ此旨請ひ申さん爲め参りたる由申す、兵士等此を聞きて
人々の身にも水戸に捨遣きたる妻子の上と思ひ合せて哀を催し暫時待せたまて此由耕
雲齋に告ぐ耕雲齋新吉を幕の内に入れてさて之を見るに新吉は地上に平服して初の如
く述るを聞きて耕雲齋涙を浮べ軍造を引出すべしと云番兵軍造を縛したるまゝ引出す

こゝに於て軍造今首振られぬらむと覺悟して出るに思かけず、新吉の平服してあるを
 見て大に驚きて心中に思ひけるはさては新吉我を慕ひて此あたりまで愛吟て終に捕れ
 たるものならむ生強のこととして親子こゝに命を落さば盲目の妻と幼きものはいかいせ
 んと思へど詞を交すべきやうもあらずさうつむきてあるを新吉早くも此を見て我か
 くまで父の命に代らむと請ふに、情あくも親子諸共に首打たむとてかくは引出さるゝ
 ものかなこはいかにせむ父上といはむとすれど云かねて涙と共に打伏したり、耕雲齋
 は自親く軍造の後に廻り縛繩を切りいかに田代氏見らるゝ如く其許の子息の參られて
 其許の命に易らむと云、孝心の至り神人其志に感動せざらむや、其許をこゝに留め
 たること軍の習止を得ぬに出るものにて、素來其許に於て聊も悪しみをかくるにあ
 らず、今は孝子の志にめで、放ち歸すなり、今より其藩主に對して忠勤を抽んでら
 れよさて汝も今我云ふ處を聞れたるべし、其孝心を怠らず父母に事へて猶文武の道を
 勵れよといとねんごろに云ふ、然るに耕雲齋は伊賀守を受領し五位に叙せられたる上

に舊慕三親家の一家たる水戸家の家老たりしが小藩の足輕田代に對してかくまで丁寧
 に述べたれば、軍造は唯涙にくれて打臥したりしが心中には、今この武田が語は骨に徹
 りて忘れがたし我若浪人の身にてあらは此人の爲めに一命を捨むものと思ふなりと
 親子耕雲齋の前に頓首して感泣に堪へざる様なり、斯て親子打連れて峠を下へ下り行
 くを武田方の諸士之を遙に見送り眉庇に小手をかざしてこの父子が後蔭を見わすある
 まで見やりつゝあはれ水戸にある我々が小供の生ひ先も、この新吉の如くあらせまほ
 しきをと云あへりとなん、此の二の物語なる初めの方は森但馬が主人に對して、表は
 不敬に似たる語を發したれども、其内情は主を思ふ處の誠意に栗山感動したる語によ
 りて遂に長政も之に應じて甚感動せし事、例令森但馬が情は春の氣の如く、其情に、
 感動したる栗山大膳か言は春の氣に感して聲を發する鶯の如く、又栗山の感情再轉
 して、黒田長政の怒を和きたるは、鶯の聲を聞く人の猶春の心地するものゝ如し、次
 なる田代新吉が孝心に感じて耕雲齋が其親軍造に懇情を懸け、軍造は又耕雲齋の情に

感じたるも、専ら此れに同じきものなり其誠意の切なるに、發する言には人心如此、
況んや神明に於てをや、されば誠意の極まる處より祈る言は幽冥に通して神明必ず之
を受け給はんこと疑なきものなり

講演集 第三編終

明治四十年一月十日印刷
明治四十年一月十三日發行

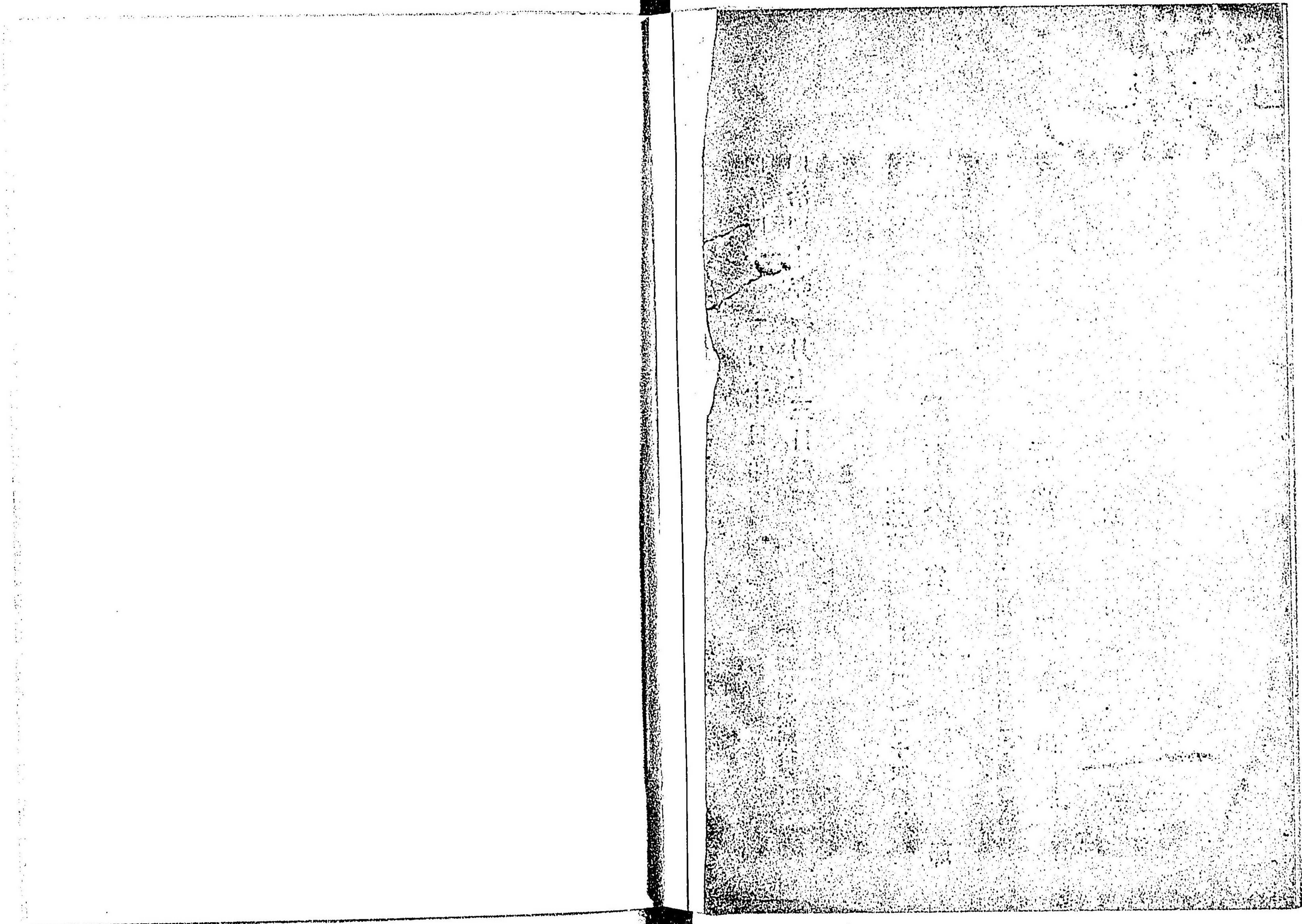
(一部定價金貳拾錢)

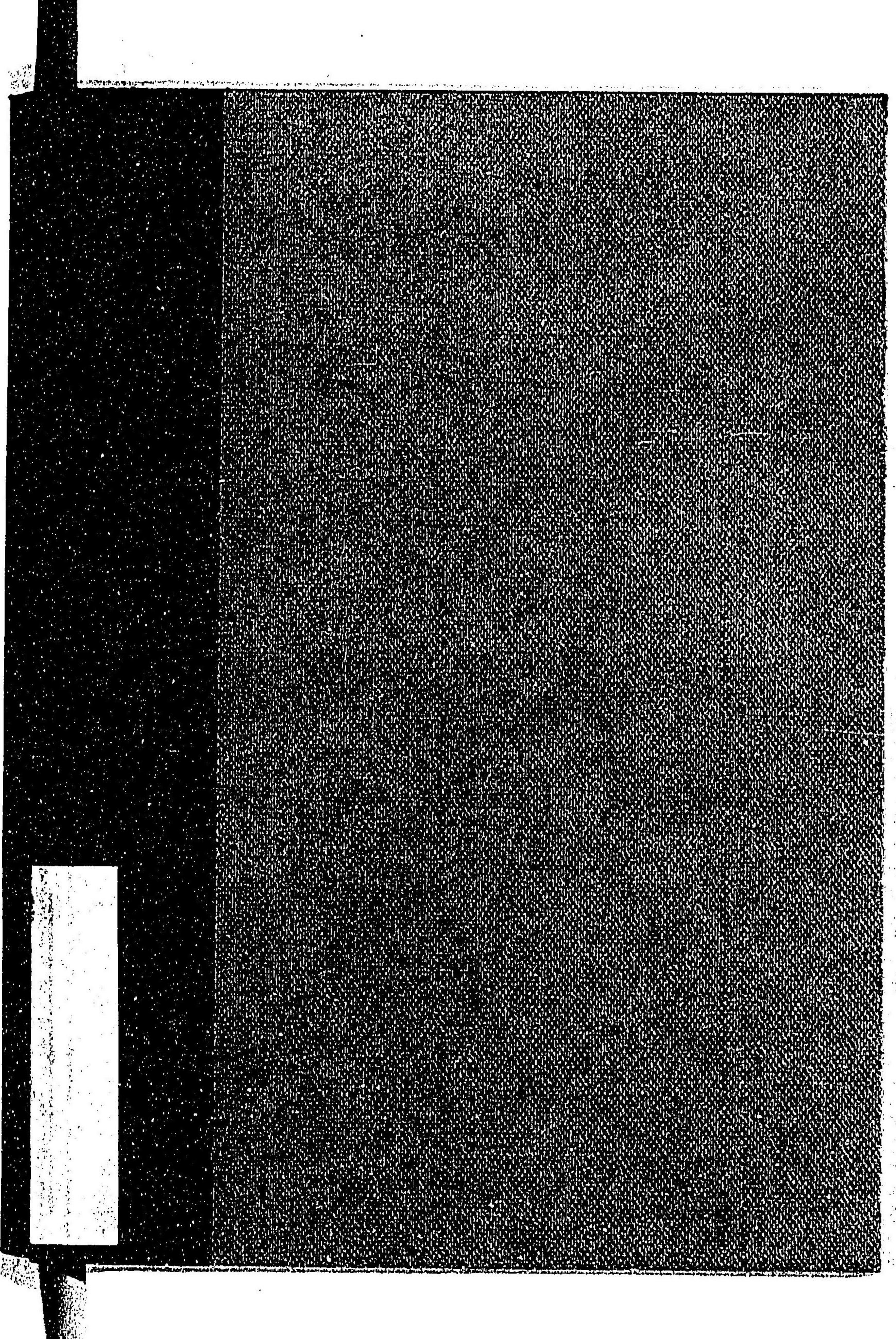
發行人 宮 井 鐘 次 郎
東京市小石川區江戸川町十四番地

發行所 神 風 會 出 版 部
東京市小石川區江戸川町十四番地

印刷所 大日本慈善協會活版部
東京市小石川區江戸川町十四番地







特21

774

堀秀成先生講演集
第參編

国立国会図書館